

指宿市考古博物館

時遊館 C•C•C• はしむれ

平成 19・20 年度

博物館年報・紀要

第8号

平成 21 年 3 月

指宿市教育委員会

目 次

事業報告編

平成19年度各事業の実施状況

1. 博物館事業の部	1
2. 後援・共催・協賛事業、及び施設利用の部	4
3. 発掘調査の部	4
4. 文化財保護管理の部	5
5. 刊行物の部	5

平成20年度各事業の実施状況

1. 博物館事業の部	5
2. 後援・共催・協賛事業、及び施設利用の部	9
3. 発掘調査の部	11
4. 文化財保護管理の部	11
5. 刊行物の部	13

紀要編

子どもたちが考えた「未来の指宿」

ミュージアムティーチャー 赤崎亜希子 黒岩朋代 有村まなみ 14

『柳田小学校正門前の石碑をめぐって』—ある図書館職員との対話—

大成・利永校区公民館主事 松下尚明 18

越前島津家奥祐筆日記について—玉里文庫蔵『誠忠武鑑』裏打ち紙文書—

鹿児島大学法文学部 丹羽謙治 26

【謝 辞】

丹羽謙治氏、松下尚明氏には、玉稿を賜りました。記して感謝申し上げます。

平成19年度各事業の実施状況

平成19年度に実施した主な事業は以下の通りである。以下、その概要を記す。

1. 博物館事業の部

(1) ゴールデンウィークイベント（4月28日～5月6日 体験者数464）

勾玉作り・ペーパークラフト・あんぎん編み体験・絵付け体験・マグネット作り・キーホルダー作り・静電気クラゲ作り・ミニロケット作り・空気砲体験の9つの創作活動を実施した。

(2) 学びのふるさと講座（全9回、聴講者数446）

鹿児島国際大学と連携し、全9回の講座を実施、うち5講座を博物館で開催した。講座生を募集して参加を募るとともに、一般聴講者も参加できるものとした。

開催日	テーマ	講 師	会 場	聴講者数
1 7月7日	鹿児島ゆかりの文学作品を読む	三嶽公子 (かごしま文化研究所副理事長)	指宿図書館	45
2 8月1日	焼き物から幕末・明治の薩摩と指宿を見る	深港恭子(指宿白水館学芸員)	COCCOはしむれ	62
3 9月1日	天璋院篤姫の生涯と幕末薩摩	寺尾美保(尚古集成館学芸員)	COCCOはしむれ	82
4 9月8日	サツマイズム・いろは歌と郷中教育	島津義秀(精矛神社宮司)	COCCOはしむれ	33
5 9月22日	キャンバス・コンサート	—	鹿児島国際大学	21
6 10月20日	歴史や比較を通して読書を楽しむ—薩摩藩英国留学生、椋鳩十、そしてジャック・ロンドン—	森孝晴(鹿児島国際大学教授)	指宿図書館	38
7 11月3日	島津斉彬と指宿との関わり	中野翠(元指宿高校校長)	山川図書館	85
8 11月23日	薩摩藩留学生と篤姫の時代	犬塚孝明 (鹿児島純心女子大教授)	COCCOはしむれ	40
9 12月15日	地域活性化と観光ボランティア —篤姫ブームをどう活かすか—	吉田春生 (鹿児島国際大生涯学習センター長)	COCCOはしむれ	40
合計				446

(3) ミニ企画展『自由研究にピッタリ！家のまわりの昆虫と貝がら展』(8月20日～8月31日 入場者数525)

貝の名付け会の開催に合わせて、児童・生徒の学習支援に資するため、指宿近海の貝・奄美大島近海の貝など932種約1200点の標本と鹿児島県立博物館から借用した昆虫標本・岩石標本1381種2541点を用いたミニ企画展を実施した。



ミニ企画展展示の様子



ミニ企画展見学の様子

(4) ミニ企画展『絵で見る昔のいぶすき』(12月28日～20年1月20日 入場者数700)

過去の企画展の資料から、様々な絵や写真などを展示して、昔の指宿を紹介するミニ展示を実施した。

(5) いぶすきシルバー美術展(8月10日～8月24日)

鹿児島県内在住の60歳以上の方々の絵画作品を公募し、一堂に展示するユニークな美術展である。創作活動の一般公開の場として、また、芸術文化の振興に寄与することを目的として平成2年度から開催しており、今年度で第18回目を迎える。出展者数146名、196点の作品を展示了。

(6) 学習支援活動

来館者に対する学習支援活動の他、博物館実習生や職場体験学習の受入、市内各学校の総合的な学習の時間の支援等を実施している。実施状況は、次のとおりである。

平成19年度学習支援（館内案内・体験学習支援）

月	日	曜日	学校名	人数	体験学習（記載のない団体は見学案内ののみ）
1	4	金	志学館高校	147	
2	27	金	開聞小学校	43	
3	5	火	丹波小学校	34	
4	2	水	前之浜小学校	13	石勾玉
5	10	木	開聞小学校	46	土勾玉
6	14	月	紫原小学校	134	消しゴム勾玉・火おこし
7			育英館 中等部・高等部	225	
8	17	木	安楽小学校	36	石勾玉・消しゴム勾玉
9			吉野東中学校	119	
10			勝岡小学校	61	
11	18	金	葉子野小学校	33	土勾玉
12			五十市小学校	145	
13	23	水	湾小学校	47	
14	24	木	笠野原小学校	48	消しゴム勾玉・火おこし
15	25	金	高城小学校	74	土勾玉
16			三股西小学校	141	土勾玉
17			沖水小学校	168	
18			乙房小学校	21	
19	30	水	西原小学校	120	石勾玉
20			菱田小学校	26	
21	31	木	国見小学校	23	
22	6	火	川尻小学校	15	石勾玉
23	6	水	岩北・岩南小学校	22	
24	8	金	永化女子商業高等学校	7	石勾玉
25			丹波小学校	87	総合的な学習の時間での体験活動事前学習
26	26	火	丹波小学校	78	石勾玉・あんぎん・矢じり・石斧・堅穴住居作り
27	9	月	春日中学校	41	石勾玉・あんぎん・矢じり・石斧・堅穴住居作り
28	12	水	大宰府西中学校	37	石勾玉・あんぎん・矢じり・石斧・堅穴住居作り
29			今和泉小学校	10	
30	13	木	嬉野中学校	27	石勾玉
31	14	金	那珂川北中学校	32	石まがたま・あんぎん編み体験
32			筑紫野南中学校	23	石勾玉
33	20	木	平野中学校	75	石勾玉
34	10	木	鹿児島大学付属 特別支援学校 中等部	21	消しゴム勾玉
35			丸野小学校	22	土勾玉
36	12	金	魚見小学校	31	消しゴム勾玉・火おこし
37			今和泉小学校	20	石まがたま・火おこし
38	17	水	深田小学校	22	土勾玉
39	18	木	大東小学校	34	

40	20	土	ラ・サール学園	167	
41	24	水	大畠小学校	17	消しゴム勾玉
42	25	木	志布志小学校	92	
43			三校合同小学校	37	
44	26	金	上長飯小学校	115	土勾玉
45			秋山小学校	11	
46			利永小学校	22	消しゴム勾玉・火おこし
47			喜入小学校	87	石勾玉・消しゴム勾玉
48	11	木	高原小学校	66	
49	2	金	南中学校	126	
50	6	火	大成小学校	39	
51	8	木	西小学校	63	
52	9	金	油津小学校	75	石勾玉
53	13	火	春日野小学校	43	石勾玉
54	28	水	末吉小学校	125	
55	12	金	鶴丸高校	42	石勾玉
56	3	木	玉龍中学校	7	あんぎん
57	7	金	玉龍中学校	12	土勾玉・あんぎん・キーホルダー
			合計	3,454	

出前授業・出前体験学習・職場体験学習等

月	日	曜日	団体名	人数	体験学習
1	7	木	北指宿中学校職場体験学習	3	館蔵書籍業務・土器洗い・受付体験・あんぎん 編み学習支援・校区文化財バトロールなど
2	11	水	西指宿中学校郷土学習	100	郷土学習（篤姫についての講話）
3	8	水	博物館実習生受入（麻布大学）	1	～31日まで（企画展立案実習、ワーキング作成、シル バ-美術展出品実習等）
4	9	木	大山地区高齢者学級	14	あんぎん編み体験
5	11	木	大園原公民館	24	石勾玉・土勾玉
			合計	142	

(7) 企画展「遊～節句人形となつかしいおもちゃ～」の開催（平成20年2月10日～5月18日 入場者数3,984）
 こどもが誕生してから成長していく中で行われる節句を紹介し、社会における通過儀礼の意義を考えるきっかけを提案するとともに、昔のおもちゃや遊びを紹介し、玩具の歴史を振り返る内容で企画展を実施した。節句がテーマでもあるため、年度を越え5月までの期間とした。また、関連イベントとして市内の幼稚園・保育園児らのひな飾り、こいのぼり等を館内に展示した他、「いちご大福作り体験」を開催した。



企画展示の様子1



企画展示の様子2

2. 後援・共催・協賛事業、及び施設利用の部

(1) 時遊館C O C C O はしむれ友の会活動支援

友の会の主な活動は下記のとおりである。各事業について連携しながら開催した。NHK大河ドラマ「篤姫」の放送を前に、今和泉島津家関連の史跡や篤姫についての学習が活動の中心となった。

■総会・土鍋作り体験（7月21日）、■ふるさと学びの講座への参加（各回随時）、■南摺ヶ浜遺跡現地説明会参加（9月15日）、■今和泉地区文化財探訪・青龍寺見学（12月9日）、■鹿児島篤姫館・島津家ゆかりの文化財見学（2月24日）、■春の野草を食べよう！（3月22日）

(2) バロン吉元漫画原画展（11月10日～14日 入場者数114）

本市出身の画家龍まんじ氏は、バロン吉元の名前で漫画家としても知られ、「柔侠伝」シリーズなど広いジャンルで活躍中の作家である。漫画の原画等、貴重な作品の数々が展示された。

(3) 展示会等の施設利用

■さつき展（5月19日～5月24日）、■写真展「折々の花 折々の風景」（12月19日～12月23日）等

3. 発掘調査の部

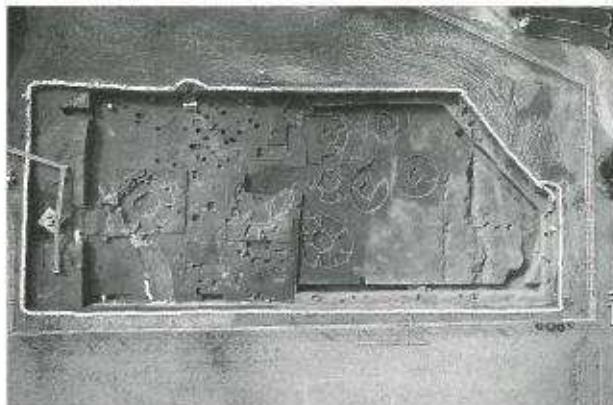
(1) 小学校校舎整備事業に伴う南丹波遺跡発掘調査

（4月16日～平成20年3月31日）

指宿市立丹波小学校の新築に伴い、建設予定地の発掘調査を実施した。

■調査面積 1,166m²

■成果概要 古墳時代の土器捨て場、弥生時代後期～終末期の竪穴式住居群（9基検出）が検出された。竪穴式住居については、花弁型を呈するものもあり、本市では初めての事例となった。



南丹波遺跡竪穴式住居群

(2) 広域営農団地農道整備事業に伴う西多羅ヶ迫遺跡出土遺物整理（4月17日～平成20年3月31日）

平成14・15・17年度に実施した西多羅ヶ迫遺跡の出土資料の整理作業を実施した。整理期間は、平成21年度まで、平成23年度に報告書の刊行を予定している。

(3) 市内遺跡確認調査

お茶の水女子大学鷹野光行教授を研究代表者とする科学研究費補助金「特定領域研究」『わが国の火山噴火罹災地における生活・文化環境の復元－九州を中心に－』の研究プロジェクトと共同し、敷領遺跡の確認調査をメインに開発対応に伴う遺跡の有無調査を実施した。

遺跡名	所在地	調査期間	面積	調査原因	主な遺構	主な遺物
敷領遺跡	指宿市十町 2230	8月6日～10月5日	75 m ²	遺跡範囲確認	874年3月25日の開闢舌 噴火で埋没した水田遺構、 及び古墳時代の柱状遺構	成川式土器片
成川遺跡	指宿市山川成川字曲道5185-2	7月30日	2 m ²	個人住宅	なし	弥生式土器片
南摺ヶ浜遺跡	指宿市十二町字向吉原 3632-5	5月10日	2 m ²	店舗建設	なし	なし
水迫遺跡	指宿市西方	12月20日、21日	11.4 m ²	道路建設	縄文時代草創期の可能性 があるピット	なし

(4) 科学研究費補助金研究「わが国の火山噴火罹災地における生活・文化環境の復元」プロジェクトへの協力

表記の研究に協力し、敷領遺跡内での発掘調査地点の選定、調査準備等の協力作業を行った。同プロジェクトチームによる発掘調査の概要は次のとおりである。

■調査期間 8月18日～8月30日

■調査成果 874年の開聞岳噴火で埋没した畠跡が検出され生産遺構の広がりがつかめた。

4. 文化財保護管理の部

(1) 国指定史跡指宿橋牟礼川遺跡買上事業

■目的 平成7年度に国指定史跡に追加指定された指定地の追加購入を行い、史跡の保存と活用に資する。

■内容 追加指定地18,636.59m²のうち、251m²を購入した。文化庁と鹿児島県の補助事業である。

(2) 指定文化財管理

文化財防火デー（平成20年1月26日）

指宿市岩本の今和泉島津家関連史跡、枚聞神社で防火訓練を実施し、関係者他、地域住民の参加のもと防火訓練を実施、文化財保護活動の大切さについて理解・協力を求めた。

指定文化財等の保護

今和泉島津家墓地の説明板、松尾城跡説明版、濱崎太平次関連史跡案内板等の修理・修復を行った。

5. 刊行物の部

(1) 平成19年度企画展「遊一節句人形となつかしいおもちゃー」展示図録刊行

ひな祭り、ひな飾りの解説を中心に節句の由来や歴史、地域の伝行事等を掲載した。

(2) 市内遺跡範囲確認調査発掘調査報告書刊行

平成19年度に実施した敷領遺跡等の確認調査に伴い報告書を刊行、遺跡の記録保存を行った。

平成20年度各事業の実施状況

平成20年度に実施した主な事業は以下の通りである。以下、その概要を記す。

1. 博物館事業の部

(1) ゴールデンウィークイベント（4月28日～5月6日 体験者数230）

勾玉作り・ペーパークラフト・あんぎん編み体験・絵付け体験・マグネット作り・キーホルダー作り・風車作り・ミニ兜作り・石ころアート体験の9つの創作活動を実施した。

(2) 学びのふるさと講座（全8回 聴講者数253）

鹿児島国際大学と連携し、全8回の講座を実施、うち7講座を博物館で開催した。大河ドラマ篤姫の放送を鑑み、歴史講座については幕末をテーマに取り上げた。

回	開催日	テーマ	講師	会場	聴講者数
1	7月12日	子育てを楽しもう	養毛良助 (鹿児島国際大学教授)	COCCOはしむれ	33
2	8月30日	幕末の薩摩の密貿易と指宿	徳永和喜 (鹿児島県歴史資料センター黎明館)	COCCOはしむれ	49
3	9月13日	絵地図で指宿を考える	梶原 武 (鹿児島県歴史資料センター黎明館)	COCCOはしむれ	18
4	10月4日	幕末と明治の南薩の開発 -経済・情報-	三木 靖 (鹿児島県立短期大学名誉教授)	COCCOはしむれ	40
5	10月18日	薩摩の貨幣鋳造	徳永和喜 (鹿児島県歴史資料センター黎明館)	COCCOはしむれ	52
6	11月22日	楽しいストレッチ	岡元妙織 (岡元妙織バレエスタジオ代表)	COCCOはしむれ	17
7	12月6日	ジャズの魅力について キャンバスコンサート	久保 穎 (鹿児島国際大学教授)	鹿児島国際大学	15
8	1月17日	どうして なぜ 指宿の植生	寺田仁志 (鹿児島県立博物館)	COCCOはしむれ	29
合計					253

(3) はしむれ日曜講座（聴講者数135）

「篠姫」に関連する講座や指宿フィールドミュージアムの実現に向けてその可能性を探る講座など新しい指宿の魅力を紹介するため、年4回、日曜日に学芸担当者による講座を開催した。

日時	テーマ	講師	概要	聴講者数
6月22日	湯農宿まちかど博物館 「まだまだあるぞ指宿の宝」	渡部徹也	指宿フィールドミュージアムの実現に向けて、山川港を時間軸に指宿の見所を紹介。	40
9月28日	指宿幕末講座「篠姫ゆかりの地、指宿」	吹留義輝	篠姫の江戸への道のりを辿る講座。講座後、鹿児島県歴史資料センター黎明館で「篠姫展」見学。	44
12月21日	指宿幕末講座「江戸の面影が残るまち 宮ヶ浜の魅力に迫る」	鎌田洋昭	登録有形文化財となった三日月突堤、商家や文化財など宮ヶ浜地区の歴史を紹介。	25
3月7日	湯農宿まちかど博物館「繋げよう、広げよう まちかど博物館の輪」	中摩浩太郎	指宿フィールドミュージアムの可能性を探る第2回。先進地の事例や指宿での試案を紹介。	26

(4) はしむれ土曜体験館（全8回 体験者数244）

未就学児童・児童・生徒を対象にCOCCOはしむれ友の会と連携しながら教育普及活動の一環として下記の体験学習を実施した。

	実施日	体験学習名	概要	参加者数
1	6月14日	「オリジナルうちわ作り」	オリジナルのうちわ作り講座。	16
2	8月8日	夏の星座の物語「星空観察会」	星空観察会、県立博物館事業と連携して実施。	83
3	9月13日	そば植えと石ころアート体験	友の会と共催のそば植えと小石に好きなものを描いてアートに。	25
4	10月11日	どんぐりアート体験	国指定史跡地のどんぐりを拾って、どんぐりトトロにチャレンジ。	28
5	11月29日	そば刈りと紙飛行機作り体験	友の会と共催のそば刈りと10種類の紙飛行機作り	39
6	1月10日	そばうち体験	友の会と共催。収穫したそばを調理。	12
7	2月14日	静電気クラゲを飛ばしてみよう	ビニールヒモを使った静電気実験。	11
8	3月21日	春の野草を天ぷらに	友の会と共催。池田湖畔で野草を食する体験。	30



学びのふるさと講座の様子



土曜体験館「石ころアート」の様子

(5) ミニ企画展「海の宝石いぶすきの貝たち」（8月19日～8月31日 入場者数1,329）

貝の名付け会の開催に合わせて、児童・生徒の学習支援に資するため、いぶすき近海の貝・奄美大島近海の貝、橋牟礼川遺跡の貝塚（平安時代）の貝など932種約1200点、及び知林ヶ島の昆虫標本をミニ企画展として展示した。

(6) 写真展「篠姫ふるさと百選 島津家と指宿」（6月10日～21年5月31日までの予定）

「もし、篠姫が、ふるさと指宿に里帰りして指宿に残る島津家ゆかりの文化財や風景を訪ねてまわり、私たちに紹介してくれるとしたら」という設定で、100カットの写真を80枚のパネルで展示。戦国時代から幕末にいたるま

での島津家と指宿の関係を解説し、篤姫のふるさと指宿が、薩摩藩にとって重要な役割を果たしたことを紹介する写真展を開催した。現地見学希望者のために史跡マップも用意した。

(7) いぶすきシルバー美術展（8月3日～8月17日）

鹿児島県内在住の60歳以上の方々の絵画作品を公募し、一堂に展示するユニークな美術展である。創作活動の一般公開の場として、また、芸術文化の振興に寄与することを目的として平成2年度から開催しており、今年度で第19回目を迎える。出展者数162名、224点の作品を展示した。



篤姫ふるさと百選「島津家と指宿」展示状況



シルバー美術展会場の様子

(8) 学習支援活動

来館者に対する学習支援活動の他、博物館実習生・職場体験学習の受入、市内各学校の総合的な学習の時間の支援等を実施している。実施状況は、次のとおりである。

平成20年度学習支援（館内案内・体験学習支援）

平成20年12月現在

月	日	曜日	学校名	人数	体験学習
1	4	金	志学館高校	104	
2	30	水	川尻小学校	22	石勾玉
3	5	金	谷山北中学校	151	
4	13	火	前之浜小学校	11	石勾玉
5	15	木	五十市小学校	126	
6	16	金	四校連合小学校	39	消しゴム勾玉
7			柳田小学校	68	
8	22	木	笠野原小学校	61	消しゴム勾玉・火おこし
9			開聞小学校	31	消しゴム勾玉
10			勝岡小学校	56	
11	23	金	乙房小学校	33	
12			沖水小学校	155	
13	28	水	香月小学校	77	
14			菱田小学校	27	
15			国見・川上合同小学校	35	
16			湾小学校	55	土勾玉
17	29	木	西原小学校	116	石勾玉
18			三股西小学校	132	
19	30	金	妻南小学校	104	
20			青戸小学校	38	
21	6	木	東間小学校	77	
22	6	金	永化女子商業高等学校	8	石勾玉
23	17	火	丹波小学校	84	総合的な学習の時間

24	7	1	火	丹波小学校	82	石勾玉・あんぎん・石斧・火おこし
25		15	火	徳光小学校	12	
26	9	11	木	嬉野中学校	18	石勾玉・消しゴム勾玉・絵付け
27		12	金	平野中学校	84	石勾玉
28		25	木	柳田小学校	34	
29	10	2	木	柳田小学校	31	
30		16	木	別府小学校	26	石勾玉
31				丸野小学校	26	土勾玉
32				指宿小学校	50	
33		23	木	大畑小学校	23	消しゴム勾玉
34				三校合同小学校	46	
35		24	金	安久小学校	48	
36				今和泉小学校	15	消しゴム勾玉・火おこし
37				生見小学校	15	消しゴム勾玉
38		29	水	喜入小学校	80	石勾玉・消しゴム勾玉
39	11	5	水	志学館・中等部	119	
40		7	金	油津小学校	79	石勾玉
41				有明小学校	29	
42		11	火	大成小学校	54	理科（火山の学習）
43		13	木	鴨池中学校	151	
44		14	金	西小学校	116	
45				筑紫野南中学校	84	石勾玉
46		17	水	寿小学校	98	
47		26	水	末吉小学校	115	
48	12	18	木	那珂川西中学校	23	石勾玉
				合計	3,068	

出前授業・出前体験学習、職場体験学習等

月	日	曜日	団体名	人数	体験学習内容等	
1	5	16	木	北指宿中学校職場体験学習	3	館蔵書籍業務・土器洗い・受付体験・学習支援・校区文化財パトロール
2	9	27		南指宿中学校職場体験学習	7	～28日まで 同上
3	2	21		南指宿中学校職場体験学習	4	～23日まで 同上
4	11	18	火	西指宿中学校郷土学習	27	市内の歴史遺産・文化遺産をフィールドミュージアムの視点から紹介。
5	10	23	木	川尻小学校理科（大地の動きと火山の学習）	21	学校周辺の身近な火山や地形から大地の動きを学習。
6	9	5	金	丹波小学校社会科（伊能忠敬と測量技術について）	80	伊能忠敬が指宿の海岸線を測量した事を紹介・また、歩測で校舎の長さを測る体験を実施。
7	11	28	金	柳田小学校	63	揖宿神社周辺文化財探訪
8	5	14	水	徳光ふれあいクラブ	8	あんぎん編み体験
9	6	21	土	小川区子ども会	39	あんぎん編み体験
10	7	18	金	井手方集落すこやかサロン	21	あんぎん編み体験
11	7	24	木	博物館実習生受入（高知大学）	2	～8月3日（企画展立案実習、ワーキング作成、シルバーニュース美術展列品実習等）
12	9	10	水	小川おたっしゃクラブ	9	あんぎん編み体験
13	11	28	金	丹波小学校夢探しの旅	4	土器洗い・勾玉作り
14	12	20	土	魚見校区公民館	51	石勾玉

15	1	15	木	開聞老人クラブ	32	石勾玉
16	9	27	木	大山地区高齢者学級	9	あんぎん編み体験
17	11	22	木	大園原公民館	9	石勾玉・土勾玉
18	8	11	月	地域貢献体験研修（指宿養護学校教諭）	1	～13日まで
19	8	11	月	地域貢献体験研修（丹波小学校教諭）	1	
20	8	25	月	地域貢献体験研修（北指宿中学校教諭）	2	～27日まで
合計		393				



学習支援活動・出前授業の様子

(9) 企画展「今和泉島津家と篤姫の生きた時代」（平成21年1月14日～5月31日）

今和泉島津家の果たした役割と篤姫の生きた激動の時代をテーマに企画展「今和泉島津家と篤姫の生きた時代」を開催した。天璋院篤姫を生んだ今和泉島津家の実像に迫り篤姫のルーツを紐解くとともに、篤姫が生きた時代を「於一の時代」、「篤姫から散子の時代」、「天璋院の時代」の3章に分け、篤姫の動向と時代との関わりを探った。

■主な展示資料

今和泉島津家鹿児島屋敷写真、西郷隆盛のシャツ、小松帶刀の琵琶（期間限定）、篤姫が出水に残した寿老人団と旅箪笥 濱崎太平次資料（手形箱・屋敷図）、今和泉島津家出土資料、島津吉貴など歴代藩主奉納品、島津忠温・島津忠厚棟札、今和泉郷絵図、豊玉姫神社棟札、薩英戦争関係資料、天璋院篤姫から下賜された手あぶり、久光直筆カルタ、断髪の天璋院写真、西南戦争関係資料、山川港付近絵図、琉球王子扁額、黒船図など



企画展示の様子1



企画展示の様子2

2. 後援・共催・協賛事業、及び施設利用の部

(1) 時遊館C O C C O はしむれ友の会活動支援

平成20年度の活動は次のとおりである。

- 総会（6月22日）、■学びのふるさと講座・はしむれ日曜講座への参加、■そば植え～そば打ち体験の実施（9月14日～21年1月10日）、■天璋院篤姫展見学（9月28日）、
- 宮ヶ浜地区史跡探訪（3月8日）、■春の野草を天ぷらに（3月21日）



そば打ち体験の様子



史跡探訪の様子

(2) 科学研究費補助金研究「わが国の火山噴火罹災地における生活・文化環境の復元」プロジェクトへの協力

お茶の水女子大学鷹野光行教授を研究代表者とする表記の研究に協力者として参加し、調査地点の選定や事前準備などを行った。なお、同プロジェクトチームが実施した発掘調査の概要、成果は以下のとおりである。

■遺跡名 敷領遺跡（中敷領地点）

■所在地 指宿市十町2256-1

■調査主体 鹿児島大学・お茶の水女子大学

■調査目的 科学研究費補助金「特定領域研究」「わが国の火山噴火罹災地における生活・文化環境の復元－九州を中心にして－」の研究プロジェクトによる学術調査

■調査の経緯 2005、2007の2回にわたり、同プロジェクトの学術調査において、874年3月25日の開聞岳噴火で埋没した水田跡、畠跡を検出、広範囲に及ぶ生産地が確認されていた。今回は、それらを営んだ人々の集落域を特定するため、市教委も協力し調査地点を選定。同プロジェクトの一員である東京工業大学チームが発掘調査前に地中レーダ探査を実施し、そのデータに基づいてトレーンチを設定した。

■調査面積 84m²

■調査成果 874年3月25日の開聞岳噴火で埋没した建物跡（約4m×6m、2間×3間の平地式住居）
敷領遺跡一帯では、874年段階で、推定20haに及ぶ大規模な水田が造営されていたことが判ってきた。一方で、この大規模な生産地を経営した集団の集落の所在を把握することが課題であった。今回、874年3月25日の開聞岳噴火で埋没した住居跡が発見され、調査地点を含め、この近辺が居住区と考えられる。



発掘調査風景



現地見学会の様子

(3) 篠姫のひなまつり（平成21年2月1日～3月31日）

観光かごしま大キャンペーン推進協議会が主催する肥薩線全線開通100周年関連イベント「篠姫のひなまつり」に参加し、館所蔵の雛人形・土人形の展示を行った。

(4) 入館者30万人達成記念セレモニー

平成20年8月22日、30万人目の入館者を迎えて記念セレモニーを開催した。



篠姫のひなまつり展示風景



入館30万人達成記念セレモニー

(5) 展示会等の施設利用

■さつき展（5月17日～5月25日）、■理科作品展・図画作品展（9月4日～9月22日）、■山川写楽クラブ写真展（11月21日～11月25日）■写真展「折々の花 折々の風景」（12月13日～12月17日）等

3. 発掘調査の部

(1) 市内遺跡確認調査

お茶の水女子大学鷹野光行教授を研究代表者とする科学研究費補助金「特定領域研究」「わが国の火山噴火罹災地における生活・文化環境の復元－九州を中心にして－」の研究プロジェクトと共に、敷領遺跡の確認調査をメインに開発対応に伴う遺跡の有無調査を実施した。

遺跡名	調査面積	調査期間	時代	遺構等	遺物	特記事項
敷領遺跡 中敷領第1地点	12.2 m ²	7月2日 ～3日	874年	掘立柱建物跡・ 道跡	土師器・須恵器	874年の開聞岳噴火で埋没した建 物・道跡と災害復旧痕跡の発見。
敷領遺跡 第7地点	17.5 m ²	6月3日 ～17日	古墳 奈良～平安	竪穴住居 畠	成川式土器 -	弥次ヶ湯古墳と同時期の竪穴住居 を初めて発見。
敷領遺跡 上ノ原地点	11.5 m ²	6月23日	奈良～平安	畠・河川	-	敷領遺跡の平安時代の埋没河川を 発見。
敷領遺跡 中敷領第2地点	6 m ²	7月9日	奈良～平安	河川 古墳時代遺物包 含層	成川式土器	敷領遺跡の平安時代の埋没河川を 発見。
敷領遺跡 後ノ園地点	10.3 m ²	7月2日	古墳～平安	-	-	
成川遺跡	33.5 m ²	10月13日 ～15日	874年 古墳	道跡 古墳時代遺物包 含層	成川式土器	成川遺跡の集落へ向う（？）道跡 と古墳時代の土器捨て場。
南摺ヶ浜遺跡	8 m ²	5月26日	縄文	遺物包含層	土器片	古墳時代の巨大墓域に隣接する地 点の確認調査。

(2) 小学校校舎整備事業に伴う南丹波遺跡発掘調査（10月4日～平成21年2月27日）

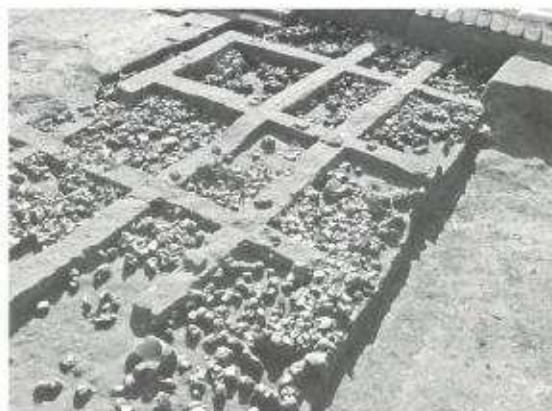
昨年度に引き続き、指宿市立丹波小学校の新築に伴い、建設予定地の発掘調査を実施した。

■調査面積 350m²

■成果概要 古墳時代の土器捨て場、弥生時代後期から終末期にかけての竪穴住居5基が検出され、遺構の広がり
が確認された。



敷領遺跡確認調査の様子



南丹波遺跡で検出された土器捨て場

(3) 広域営農団地農道整備事業に伴う西多羅ヶ迫遺跡出土遺物整理作業（5月16日～平成21年3月31日）

平成14・15・17年度に実施した西多羅ヶ迫遺跡の出土資料の整理作業を実施した。整理期間は、平成21年度まで
で平成23年度に報告書の刊行を予定している。

4. 文化財保護管理の部

(1) 国指定史跡指宿橋牟礼川遺跡買上事業

■目的 平成7年度に国指定史跡に追加指定された指定地の追加購入を行い、史跡の保存と活用に資する。

■内容 追加指定地18,636.59m²のうち、248.63m²を購入した。文化庁と鹿児島県の補助事業である。

(2) 国登録有形文化財の登録

下記文化財が国土の歴史的景観に寄与し、造形の規範になっているものとして国登録有形文化財に登録された。
宮ヶ浜港防波堤（捍海堤）

■建造時期 1833年12月（天保4年）～1834年7月（天保5年）

■規模 長さ220m、幅18m、高さ5.3m。

■特徴等 海岸から沖へ延びる途中で屈曲し、三日月形を呈した離岸堤（現在は北側が埋め立てられ陸地と接続している）。

■登録年月日 平成20年4月18日

丸十金物百貨店店舗、丸十金物百貨店蔵、中俣家住宅主屋、坂本家住宅主屋、姥川菓子店店舗兼主屋

■建造時期 明治時代～大正時代

■特徴等 漆喰塗りの壁や段状に重なった屋根の造りが特徴的で、当時の姿をよくとどめている。

■登録年月日 平成20年10月23日



捍海堤



丸十金物百貨店店舗



丸十金物百貨店蔵



中俣家住宅主屋



姥川菓子店店舗兼主屋



坂本家住宅主屋

(3) 指定文化財管理

文化財防火デー（21年1月26日）

関係者他、地域住民の参加のもと枚岡神社で防火訓練を実施、文化財保護活動の大切さについて理解・協力を求めた。

指定文化財等の保護

市内指定文化財62件についてそれぞれカルテを作成し、現状を把握に努めた。また、今和泉島津家伝来の手水鉢説明板、島津齊彬公掘井碑新旧2基説明板、上野神社周辺供養塔群案内板、九郎塚説明板、天の岩屋供養塔群説明板の修理・修復を行った。

5. 刊行物の部

(1) 「今和泉島津家と篤姫の生きた時代」展示図録刊行

今和泉島津家の役割や位置付けについて考察するとともに、幕末にかけて起こった歴史的事件と薩摩・指宿への影響を紹介、それを背景に篤姫の生涯をまとめた。

(2) 平成20年度市内遺跡範囲確認調査報告書刊行

敷領遺跡等の確認調査報告書を刊行、遺跡の記録保存を行った。

(3) 広域営農団地農道整備事業に伴う多羅ヶ迫遺跡発掘調査報告書刊行

平成13年度に発掘調査を実施した多羅ヶ迫遺跡の発掘調査報告書を刊行、遺跡の記録保存を行った。

(4) 広域営農団地農道整備事業に伴う幸屋遺跡発掘調査報告書刊行

平成17年度に発掘調査を実施した幸屋遺跡の発掘調査報告書を刊行、遺跡の記録保存を行った。

子どもたちが考えた「未来の指宿」

ミュージアムティーチャー

赤崎亜希子 黒岩朋代 有村まなみ

1. はじめに

指宿市考古博物館では、平成18年度の企画展を「大好き！指宿展」と題して開催した。この時、市内の子ども達が考える「未来の指宿」を絵画に描いてもらったものを展示し、「未来の指宿」コーナーを設定することにした。平成18年度5月1日現在、指宿市の小学生は2,349名、中学生は1,306名、合計3,655名。このうち絵画を寄せていただいた人数は、小学生58名、中学生251名、合計309名で、全小学生の2.5%、全中学生の19.2%にあたる。統計学的には3,655人の集団では、830人程度のサンプル数が必要とされるので、実際集まった数では信頼性は十分とは言えない。その上、全ての学校が作品を提出しているわけではなく、中学校では特に一部の学校に提出が偏っているという問題がある。また、アンケート調査ではなく絵画として提出されたものについて、こちらで分析するという方法をとっている為、直接に意見集約したものではないという前提がある。しかし、小中学生の「未来の指宿」についての意識調査の例は近年無い。しかし、アンケート調査では事前に選択肢が設けられている為、視点が限られてしまうが、絵画調査では子ども達の自由な発想を知ることができるとと思われ、絵画を分析するという調査の例は聞かないながら、何らかの成果を期待できると考えた。そこで、現在の指宿の子ども達は未来の指宿をどのようにイメージしているのかを、提出していただいた絵画をもとに分析を実施してみることにした。

2. 分析の方法

まず309点の絵画に描かれている要素を下記のように抜き出し、それを当館の学芸員とともに次のように分類した。そして、分類項目ごとに数量をあたり、集計表を作成した。ちなみに、I：不明には五色の緩やかな曲線が描かれたものなどがある。

A : 都市化	B : 自然	C : SF的未来	D : 観光	E : 美化・環境	F : 福祉	G : 現状維持（現在あるもの）	H : 平和	I : 不明
・新幹線	・川	・砂蒸し温泉						
・遊園地、動物園	・砂浜	・足湯						
・飛行機、ヘリコプター	・蝶	・温泉						
・ロープウェイ	・鳥	・桜並木						
・ビル（ビル群）	・魚	・プール						
・大きな商店街	・知林ヶ島	・花火						
・整備されたアスファルト道路	・森、林	・歩行者専用の橋						
・広い道路	・ツマベニ櫻	・特産品						
・サッカースタジアム	・夜空、満月、星							
・アーケード街	・動物							
・多数の車	・木							
・高速道路	・公園							
・空港								
・レインボーブリッジ								
・埋め立て地								

・草原	・観光地の店
・海	・露天風呂

各分類項目の中の要素で特に多かったものを示すと、

小学生→A：都市化の1位が遊園地、動物園。2位が多数の車。

B：自然の1位が魚。2位が海。3位が山（山々）。

中学生→A：都市化の1位がビル（ビル群）。2位が整備されたアスファルト道路。

B：自然の1位が海。2位が木。3位が花（花畠）。

C：SF的未来の1位が今現実にありえないような建物、車。

2位が空飛ぶ車（宇宙的なものやUFO）。3位がアニメのキャラクター。

D：観光（地）の1位が砂蒸し温泉。2位が温泉。3位が池田湖。

E：美化・環境の1位が美しい川、海。2位がごみのない町（砂浜）。

である。

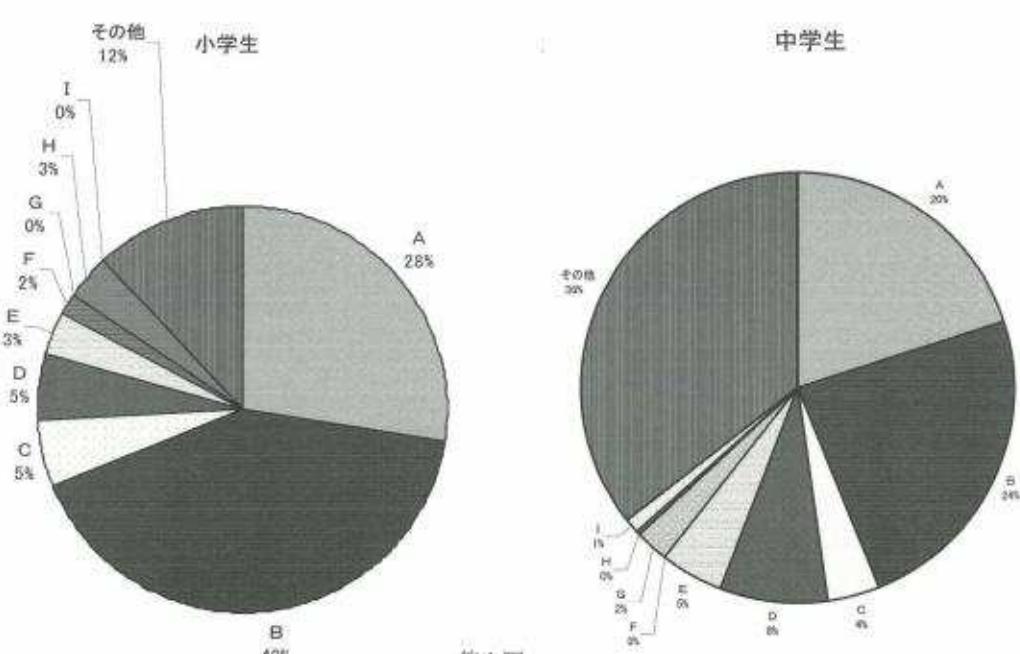
3. 分析結果

①各分類項目の比率

前項に従って、各分類項目ごとの比率を示したものが、第1表であり、これを円グラフで示したのが第1図である。なお、表中の「その他」は1枚の絵に複数の分類項目が組み合わさっているものを示す。

分類	小学生		中学生	
	枚	%	枚	%
A 都市化	16	28	50	20
B 自然	24	42	60	24
C SF的未来	3	5	10	4
D 観光（地）	3	5	20	8
E 美化・環境	2	3	12	5
F 福祉	1	2	0	0
G 現状維持（現在あるもの）	0	0	6	2
H 平和	2	3	1	0
I 不明	0	0	3	1
その他	7	12	89	36
合計	58	100	251	100

第1表



第1図

次に、第1表と第1図を見てわかる事実を示す。

- ・小学生では、B：自然が42%で一番多く、次いでA：都市化が28%となっており、それ以外の分類に大差はない。
- ・中学生では、「その他」が36%で一番多く、次いでB：自然が24%、A：都市化が20%で大差はない。また、それ以外の分類でも大差はない。
- ・どちらにも共通して言えることは、B：自然とA：都市化が多い。しかし、AとBを合わせると小学生では70%になり半数を超えるが、中学生では半数に満たない44%に留まっている。また、「その他」が小学生では12%であるのに対し、中学生では36%と多くなっている。

②その他の内訳

複数の分類項目が組み合わさった「その他」は小学生12%、中学生36%であった。以下、「その他」の内訳を示す。

小学生	中学生			
・AB 4	・AB 3	4	・BCD 1	・DE 1
・ABCD 1	・ABC 2		・BD 1	1
・BC 1	・ABD 1	0	・BDG 1	
・BH 1	・ABG 1		・BE 8	
	・AC 3		・BG 5	
	・AD 7		・BH 1	
	・AG 2		・CD 1	

上記より、小学生のうち

Aと結びつくのは、B：5点、C：1点、D：1点→計7点

Bと結びつくのは、A：5点、C：2点、D：1点、H：1点→計9点

Cと結びつくのは、A：1点、B：1点、D：1点→計3点

Dと結びつくのは、A：1点、B：1点、C：1点→計3点

Hと結びつくのは、B：1点→計1点

以上のことより、分類項目の組み合わせが示すことは、小学生ではA：都市化と最も多く関連しているのがB：自然であり、71.4%。また、B：自然と最も多く関連しているのがA：都市化であり、55.5%。つまり、小学生は「都市化」と「自然」の関係を強く意識していることが分かる。

次に、中学生のうち

Aと結びつくのは、B：47点、C：5点、D：17点、G：3点→計72点

Bと結びつくのは、A：47点、C：3点、D：23点、E：8点、G：7点、H：1点→計89点

Cと結びつくのは、A：5点、B：3点、D：2点→計10点

Dと結びつくのは、A：17点、B：23点、C：2点、E：1点、H：1点→計44点

Eと結びつくのは、B：8点、D：1点→計9点

Gと結びつくのは、A：3点、B：7点→計10点

Hと結びつくのは、B：1点、D：1点→計2点

以上のことより、分類項目の組み合わせが示すことは、中学生ではA：都市化と最も多く関連しているのがB：自然の65.2%。次に、D：観光の23.6%。また、B：自然と最も多く関連しているのがA：都市化で54.0%。次にD：観光で25.8%。また、D：観光と最も多く関連しているのがB：自然で62.2%。次にA：都市化で38.6%。

さらに3つの分類の組み合わせで最も多いのもABDで66.7%である。つまり、中学生は「都市化」と「自然」と「観光」の関係を強く意識していることが分かる。

「その他」に含まれる各分類項目について、その比率を示したものが第2表である。

分類	小学生		中学生	
	枚	%	枚	%
A 都市化	5	31	59	30
B 自然	7	44	74	38
C SF的未来	2	13	7	3
D 観光（地）	1	6	33	17
E 美化・環境	0	0	9	5
F 福祉	0	0	1	1

第2表

G	現状維持（現在あるもの）	0	0	9	5
H	平和	1	6	1	1
合計		16	100	193	100

上記の第2表を見て、分かる事実を示す。

- ・小学生、中学生ともに、B：自然とA：都市化が多い。
- ・D：観光（地）が中学生に多く見られる。
- ・E：美化・環境は、中学生のみに見られる。

4.まとめ

小学生、中学生ともに「自然」が1番多いのが特徴である。なかでも小学生では自然と戯れることをモチーフにしている絵が多く、中学生では風景として描かれている木や花が多かった。一方、指宿を象徴する開聞岳、ハイビスカス、菜の花などが描かれている絵は私たちの予想より少なかったように思う。小学生、中学生を合わせても、開聞岳は全体の8.4%、ハイビスカスは全体の5.1%、菜の花は全体の8.1%しか描かれていなかった。

次に多かったのが「都市化」であり、小学生では遊園地、中学生ではビルや大きな商店街を描いている絵が多く、指宿市の活性化を望んでいることが伺える。しかし、「都市化」といっても、自然も含んでいる絵が多いことが特徴であり、描かれているのはいずれも小規模な都市化に留まっている。また、「その他」として示したように、各分類の組み合わされた絵が多かったことも、注目すべき点である。特に中学生においては1番高い比率を占め、小学生と比べてもその差は大きい。中学生の未来像には、指宿が持つ現存の「自然」「観光」というイメージに「都市化」がからんだ未来という意識が見える。よって、中学生のほうがより複雑な絵を描いていることが分かり、未来意識が単純でないことを示している。この点については、年齢が高くなるにつれ、小学生に比べ中学生のほうがより物事の認識能力に発達が見られることが挙げられると思う。言い換えれば、小学生が一視点的な傾向が強いのに対し、中学生が多視点的になっているということである。また、小学生ではなく、中学生にあるのが「現状維持」である。中学生でも割合は少ないが、小学生なくて中学生にあるということは、中学生のほうが小学生より物事の捉え方が現実的になっていることが伺える。逆に、小学生の絵画の数が少ないにも関わらず、小学生にあって中学生にないのが、「福祉」である。これは、学校での授業の影響があるのではないかと考えられる。

すべての絵を見たところ、現実と極端にかけ離れている絵は少なく、美しい自然や発展して賑わっている観光地・商業施設などが多く描かれていることから、現在の指宿の「自然」「観光」を活かしきれていないと思っていることが考えられる。分析を通して、子供たちの年齢や状況が絵に大きく反映されていると感じた。また、提出していただいた絵のサイズにはそれぞれの学校によって違いがあり、ほとんどの中学生の絵は、10cm×20cmの大きさであった。この大きさで絵を描くには、表現したい内容にも限度があったのではないかと思われる。このような分析は初めての試みであったが、子供たちが今の指宿の自然を守りつつ、さらに人々が集う町になっていくことを望んでいることが分かった。最後に、この度の企画展に絵画を提出してくださった学校や子ども達に感謝したい。

『柳田小学校正門前の石碑をめぐって』
— ある図書館職員との対話 —

大成・利永校区公民館主事 松下 尚明

1. あれはなんだ

「いったいあれはなんだい。大事な場所に建っているあの石は」と聞く。だが、だれも的確な返事をしてくれない。柳田小学校正門に建っている石碑のことである。

小学校は、国道226号沿いにある。鹿児島から山川に向って走ると二月田に至り、駅を過ぎてすぐ左側だ。したがって、自動車で国道を走っていると、いやでも目に入る。ところが、その石碑建立の意味について誰もしらないのである。

秋〔平成20年〕の夕暮れどき、たまたま通りかかったので、自動車を体育館そばに止め、調査にかかった。しかし、薄明のなかでは読み取れない。思いを残しつつ現場を立ち去った。

あくる朝、山川図書館司書の久川さんにことの顛末をはなした。彼女がかつては柳田小学校で司書をしていたからである。

「なにかないかい。図書室には。」

彼女の顔は曇った。

「見たことも、聞いたこともないです。」

「ええっ！ 自分の通う学校に建っている石碑が何なのか関心はなかったのかい。」

彼女の顔はさらに曇った。

少し過ぎたものいいだったにちがいない。

しかし、さすがに副館長である。数日後に「分りました。分りました。」といってきた。その資料には、「河野助二昭和11年5月27日に建立。柳田尋常小学校後援会 初代会長 柳田小学校は、もともとは現柳田校区公民館にあった」と記されていた。学校側の資料提供によるらしい。

わたしはありがたくうけとったのだが、すこし腑におちない点があった。そのメモでは、どこからどこまでが碑文の内容かが分らぬからだ。また、内容にも「そうかしらん」という疑念がのこる部分があった（それは、本論文の最後に明らかにされるであろう）。

後日また、彼女がわたしのところにやってきた。「撮りました。撮りました。ケイタイです。映りはよくないのですが・・・」と。子どものようなはずんだ声だ。見ると、たしかにギザギザして、一向に字が読めない。が、わたしは嬉しかった。それまでして、なにかに喰らいつくその姿にである。

2. 忘れられた石碑の精神

さて、過日、その映りの悪い字面を追ってみた。すでに磨滅して不明の字もおおい。映りが悪いのは、なにも写真技術のせいだけではない。

が、目を皿のようにして読みとくと、つぎのような文面が刻まれていたのである。

正面の『河野翁 頌徳碑 鹿児島県知事 早川三郎 書』は問題がないであろう。

問題になるのは、土台に刻まれた文面である。

それを読み下せば、つぎのようになる。□の部分は不明の部分だ。

『翁の名は助二という。萬延元年に阿多に生まれた。明治28年、36歳のとき、住居を柳田の地に卜（ほく）し、医術を開業した。

同40年、柳田校に後援会が設立せらるゝや、挙げられて初代会長となり、爾來昭和□□年まで□□□年間、会長として盡瘁（じんすい）せられた。

現下、校運の進展、校区の親和、一（いつ）に之（これ）、翁ノ德化に俟（ま）つところである。仍（よつ）て区民、その徳を慕い、茲（ここ）に之（これ）を建つ。』



頌徳碑全景

以下『建設委員』等関係者の名前が刻まれている。おそらく、当時の柳田校区のリーダーたちであろう。

これによって分るとおり、河野は阿多の人である。阿多とは合併前の金峰町にある地名のこと。そこで暮末に生まれ、やがて医術を学び、柳田の地で病院を開いたというのである。

それから12年後、50前の河野は学校後援会が設立されるに及び、初代会長に推されたというのである。地域の人々と密着した仕事をし、かつた尊敬もされていたのである。

その会長職が何年までであったか、磨滅した碑文からは判読しがたい。だが、相當に永くこの役職を務めたことは読み取れるところである。おそらくは、柳田の名望家でもあったのにちがいない。

ただし、たんなる名望家ならば、名誉職にとどまるであろう。が、河野は、名誉職の会長ではなかったのである。そうではなく、柳田の人々に印象的な実質的仕事をしたのだ。それが、「現下、校運の進展、校区の親和、一（いつ）に之（これ）翁の徳化に俟（ま）つところである」と刻まれているゆえんである。学校教育の充実だけでなく、校区民の親和にあずかって寄与したというのである。おどろくべきことである。おそらくは、身を粉にして活動したのである。これが、校区民にその徳を慕い、頌徳碑を建てざるをえない気分にさせた理由なのである。

解明が終わるや、このことを隣室の久川司書に話した。

すると、「そうでしたか。9年間勤めていましたが、ちっともしりませんでした」という。

わたしは答えた。

「歴史をもった学校には、さまざまな石碑が建てられている。が、その現代的活用をしているところはすぐないね。考えてごらんなさい。それらの石碑は、偶然に建てられたものではないはずだよ。そうではなくて、学校への地域の人々の思いや汗が結晶したもののはずだ。

なのに、教職員がそれらに関心をしめさない。

なぜなのかい？どうして石碑の存在感がないのかい？学校はしきりに、『地域との連携』『地域に学ぶ』といっているではないか。それがだよ、このていたらくだ。まるで、現代学校教育七不思議の一つだよ。」

彼女は、不思議な顔をしつつ、「なぜなのでしょうね」とつぶやいた。

わたしはいった。

「それはきまっているではないか。学校にとって、地域との連携とはお題目にすぎないからだ。スローガンにとどまるかぎり、その実践はなかなかなのだ。もっとも、困ったときには地域に寄りかかるがね。

学校に勤務する教職員もまた（一生懸命やっている先生でさえも）、その意識は、数年間そこを無事につとめあげることに懸命だ。それが終われば、その地域のことは野となれ山となれだよ。責任をもつ必要はないからね。発展は頼うとしてもだよ。つまり、勤務の時期だけ一生懸命やればいいという意識だね。

そういう教職員が、地域の歴史を労力つかって調べるかね。それよりも、教科書の教材研究をしたほうがいいというのが常識だろうよ。でも、それで地域を教えられるのかね。「地域の魂」を語りかけられるのかね。地域を育てる学力を育てられるのかね。」

彼女の顔がますます曇りだした。

「うう～ん、うう～ん」とうなっている。

わたしはいった。

「まあ、以上のこととは極論だがね。教職員が数年間その学校に勤めて異動していくというのは県全体に責任をもつという考え方で、大事な視点もあるのだ。でもね、その陰の部分もあるということさ。」

「そうですねえ。たしかにねえ」

3. 学校後援会とは

やおら、彼女が正面を向きなおした。

「で、その学校後援会って、なんですか？」

わたしは即答しようとした。

が、まずはつぎのようにかたった。

「いい質問だね。そういう質問がプロたる司書の質問だよ。レファレンスを担当する司書のね。人間、提言能力と質問力がないとプロたりえない。ベテランとプロのちがいはそこだよ。人の話を聞くことは大事だが、『聴きっぱなし』『うなずきっぱなし』ではプロたりえない。提言能力がないとね。その力は質問力に裏打ちされているものだ。だから、質問力こそ、問題意識あふれるプロの資質だといってもいいくらいだ……。

ついつい余計なことまでかたってしまったが、それでは、学校後援会についてかたろう。」

彼女は、メモをとり出した。

わたしはつづけた。

「学校後援会はね。戦前において、いや正確にいえば明治40年ごろから戦前まで、学校教育・社会教育において大きな役割を果した団体だったんだよ。ほら、PTAならよくしっているでしょう。PTAの戦前版さ。でも戦後は、学校後援会とはいわずにPTAという。社会教育団体としてアメリカ軍に改組されたんだ。

が、学校後援会への戦後の評価は低いね。どういう風に低いかというと、それは成人教育団体ではなくて、財政的援助をする団体にすぎなかつたってね。でもね。なぜ、財政的支援団体だったら評価が低いのかね。戦後の教育学者はいよいよ。『財政的支援は条件整備をする教育行政の役割で、これをPTAが負担することは問題だ』と。

戦後の教育行政の理念に照らせば、たしかにそうだよ。が、戦前は、この学校後援会がなければにっちもさっちもいかなかつたのだよ。貧弱な教育予算を補うものとして、地域住民の労力奉仕や財政的支援は大きな役割を果した。学校を創るときなどは、児童がいる家庭も、いない家庭も、全員労力奉仕したんだ。それが学校後援会さ。だから、地域住民がひとしく、学校にたいしては『地域の学校』『おらが学校』という強力なイメージをもつたのだ。よく理解しておかなければならぬのは、たんにその地域に学校があるから、あるいはまた、そこを卒業したから『自分たちの学校』ではないのだよ。」

彼女は真顔になっている。

そして、感慨をもらした。

「なるほど、地域の学校とは『自分たちが汗を流して創った学校』という意味なんですねえ。そうかあ。それをやつたのが学校後援会かあ。すごいことですね。・・・」

わたしは答えた。

「たしかにすごいことだよ。だがね。まだまだ河野が具体的にどういう仕事をしたかは不明だね。どうしたらいいと思う？ 司書としては・・・。」

「そうですね・・・。柳田には古老の方もおられますから、石碑についてしっている人はいないか、聞いてみます。」

「そうだ。どういう伝承があるかを確認することはいいことだ。篤姫だって、今和泉にきたという文献はないけれど、伝承では『やってきた』とされている。伝承がすべて正しくはなくとも、間のなかに消えてしまった歴史の壁を乗り越えるヒントにはなるからね。だから、石碑の伝承をさぐることはきわめて大事だ。」

わたしはことばをついだ。

「もう一つやらなければならないことがあると思うよ。それは、文献資料への挑戦だ。」

これにはすぐに彼女が反応した。

「ええ？ 学校の図書室には何もありませんでしたよ。わたしがしっています。」

「そこだよ、問題は。たしかに河野についての直接的資料はないかもしれない。だが、間接資料ならあるかもしれない。例えばだよ。私の経験からすれば、つぎの3つがヒントになる。」

1つは校長室の金庫のなか。金庫の奥にはね、歴代の校長もひも解いたことのない資料が眠っているものだ。そんなものは図書室には保存していない。だから、そのなかにある可能性がある。2つ目は学校の沿革史に記載してある可能性がある。教頭先生に聞いてごらんなさい。学校において内容の濃淡はあるが、1つのヒントにはなるからね。もう1つは創立記念誌だね。まあ、50年記念誌あたりから前のものがあれば、それに記載されている可能性があると思う。」

彼女の顔が輝きだした。

「それって、是非わたしにやらせてください。9年もいて、なんにもしらなかつたなんて、司書としてなきれないことですから・・・。校長先生にも相談してみます。また、ケイタイではなく、カメラで写真を撮ってきます。」

エンジンがかかって来たようだ。

わたしは、躊躇なくいった。

「是非そうしてほしい。これを調べることはすごいことだ。千ページを超える厚い指宿市誌はあるけれど、一行ものっていないことだからね。それに成功すれば、たいへんな歴史発見だよ。頑張ってみて。」

そう激励すると、にっこりうなずいた。

4. 河野の仕事の前提

うなずいてはくれたものの、しかし、創立記念誌などの文献にどれだけのっているのか、古老からの聞き取りがはたして可能であるのか、実ははなはだ心もとないことなのである。だが、万が一の可能性にかけてみよう。時間限定なしにである。時間限定なしというのは、まさにそれこそが歴史研究の醍醐味だからだ。意識して調査することも大事だが、ふとしたときに歴史の真実に触れうることがままがあるのである。古老との出会いしかり、古記録との遭遇しかりである。

わたしはことばをついだ。

「調べるについては、広角に歴史を把握しておかなければいけない。そうでなければ、河野のかかわった学校後援会発足の意味が十分に理解できないからだ。厳密にいえば、『明治40年前後』という時代のことだ。

その時代はね、日清戦争・日露戦争という外国との戦争を経て、ようやくにして疲弊の風が国民と地方に吹きだした時期なんだよ。実のところ、日露戦争に勝利したとはいっても、それは傷だらけの勝利だったんだ。戦争中にロシアで革命がおこったために、かろうじて日本が勝利したにすぎなかったのだからね。

だから、勝利はしたものの講和条件は厳しいものがあったのよね。このために、犠牲を強いられていた国民の不満は大きかった。あちこちで政府への暴動が勃発したんだ。これは、ある意味では、日本ではじめての民衆の集団行動だったといってもいい。あるいは、この時代は、自我意識の芽生えもあった時代だ。このときに、与謝野晶子が『君死にたまふことなけれ』を書いたことは有名だね。大正デモクラシーへのかすかなる序章期でもあるといつていいだろう。

一方ではまた、『大逆事件』という天皇暗殺計画も摘発された。

政府は、こうした動きを『軽佻浮薄（けいちょうふはく）』と受けとった。

山路愛山という評論家は、この風潮を『明治元禄』とさえいった。

だから、政府はたいへんな危機意識をもったわけさ。

それだけではない。経済不況により、「町村の財政」がはなはだ苦しかった。政府は、これを乗り越えなければならない。どうしたか。「集落所有地」の市町村行政への集約だ。つまり、町村の財政を強化するために、集落の財産を寄付させたのだ。

ちょっと面白い話をすると、現在、旧指宿市の集落は財産をもっていない。が、旧山川町はもっている。その原因は、このときに、行政が集落の土地などを寄付させたか、させなかつたかに起因している。旧山川町が現在もなお区政をしいて強力な「地域力」を誇っているのは、この財産をもっているという経済力に起因しているのだよ。これが現在、大きな差になっている。合併後のコミュニティ政策の大問題が、実はこの問題なのだ。

さて、話は横道にそれてしまったが、この時代にはまた、神社の統廃合もおこなわれた。由緒不明の神社を廃止して他に合祀すれば、余計な祭典費が不要になるというわけさ。だが、そのために現在では神社の由来がごっちゃになっている。

あるいはまた、農事改良を積極的にすすめたり、『町村是』という町村振興策を策定させたりもしたんだ。

つまり、町村の財政再建・国民の生活習俗の改良政策を強力にすすめたのだね。これが『地方改良運動』と呼ばれる政策だ。それだけ、時代閉塞の実感が日本中をおおっていた。石川啄木の有名な評論『時代閉塞の現状』がその間の事情をよく表現している。

まあ、こうしたときに、いつも出番があるのが教育さ。実はこのとき、『戊申詔書（ほしんしょうしょ）』という詔書がだされたんだ。外には列強との協調、内には勤儉貯蓄・産業奨励を説いたのだが、先ほどのつながりでいうと、『国民精神教化のため』といつてもいいね。政府が、国民精神の引き締めに本腰を入れたのさ。

でも、現代のわたしたちからすれば、詔書一つで国民の精神構造を引き締められるのかって思うよね。なにしろ、国民は、時代の閉塞感を感じているのだから。ところが、それがおおいに効果ありだったのだよ。山川あたりでは、この詔書を受けて、住民の学校への土地・建物の寄付があいついだんだ。集落の土地などを行政には寄付しなかつたが、学校には大いに寄付したんだ。それだけ、精神状況が前向きになり、レベルアップしたんだね。

おそらく、そうした行為が全国的にあったのではないか。だって、この運動は、その後の地域おこしの模範になっているからね・・・。

それを教育の分野でいえば、なんとなるか。実は、運動を担う組織として『教育組合』という組織が設立されているんだ。」

「教育組合？ 教職員組合でしょう？」

いぶかしげである。

「いや、教育組合だよ。教職員組合は戦後にできたんだ。」

「でも、教育組合ってものがありましたっけ。」

なおもいぶかしげである。

高度経済成長期に生まれた現代っ子がしるはずもない。

「かいつまんでいうとね。当時の『地方改良運動』と『戊申詔書』を受けて、教育組合が設立されたんだ。で、どういうことをしたかって？」

それはね。山川の例でいえば、校区をいくつかの組にわけて、各組に組長をおいたんだ。もちろん住民の方だよ。各組の仕事は、学校への児童の出席奨励をやったり、小学校卒業生の補習教育、および男子青壯年〔当時は『壮丁（そうてい）』といった〕教育についての環境整備をやったりしたんだ。つまり、その主催者だね。教える人は組合が連れてくるのだから。

具体的にいえば、小学校卒業生に対しては、小学校の先生を連れてきて、修身・国語・算術・作法・唱歌・裁縫・機織などを補習教育として教授してもらった。期間は年3回ほどで、1回は14日間、毎日3時間だったんだ。

壮丁教育は、7月から11月まで毎週2回、毎日3時間の時間割で、国語・算術の学科のほか、軍隊の予備教育が施されたんだ。

その財源はというと、住民拠出の資金だ。資金といったって、お金はないよ。だから、鶏卵の提供とか、大豆の提供とか地域に応じいろいろだがね。つまりね、この教育組合、地域が主体になって学校教育を支援するとともに、卒業生への社会教育を施す団体だったんだ。」

「すごいじゃないですか。そんな組織が戦前にあったなんて。」

彼女は、感に堪えないような顔をして感想を述べた。

「うななんだよ。ほんとにね。すごいよね。」

こう答えて、わたしは河野の仕事をつぎのように総括した。

「ここからは、わたしの想定になるが、河野は、以上述べたものと同質の仕事をしたのではなかろうか。すくなくとも、そのためのリーダーシップを發揮したのだろうよ。たんなるリーダーシップではない。住民の心の琴線にふれるリーダーシップだったと思うね。それが、『校区の親和、一（いつ）に之（これ）頃の徳化に俟（ま）つ』という文面に現れている。

そういうリーダーシップを地域で発揮するのはじつにむずかしいね。わたしは河野翁に感服するよ。だから、学校沿革史をひもとけば、その一斑は理解されるはずだと思うのだ。」

「でも、河野翁は学校後援会長と刻まれているのではないですか。先に説明してもらった学校後援会ですよ。教育組合とはちがうのではないですか。」

2問目の質問である。

「そうだ。河野翁は、学校後援会長だ。たしかに、教育組合との関係が問題になる。それはね。設立当初は教育組合だが、ある地域では、それが学校後援会と名称変更したところもあるのだよ。もちろん、名称変更しなかったところもある。今和泉村などは変更しなかった。柳田の場合も、はじめは教育組合だったと思うけれど、おそらく県下の状況からみると、大正年間に学校後援会になり、この石碑をつくる昭和11年ごろにははじめから学校後援会だったかのごとくに了解されていたのかもしれない。いずれにしても、名称よりもそういう実質的運動が展開されていたことが重要だろう。」

まあ、河野翁は、教育組合や学校後援会を通して、頌徳碑を建立されるだけの仕事をした人物だったってことだ。どの学校にも後援会長はいたけれど、頌徳碑を建てられた人はいないからね。すごい人だったと思うよ。まさに柳田だけでなく、指宿全体の先賢だよ。」

「そうですね。もっともっと掘り起こさなければいけませんね。」

彼女は、ことの重要性に心底気づいたらしい。

夜の闇が深くなっていた。

「今日はこれくらいにして、他日を期そう。私は、学校沿革史を学校教育課に依頼をする。あなたは学校と連絡をとってくれないか。金庫の資料を見せて欲しいと。」

彼女は答えた。

「できるだけ早いうちにそうしてみます。自分の課題もありますから・・・」と。

二人は図書館を後にした。

年の瀬は、もうそこまで押し迫っていた。

5. 現地調査で解明されたこと

平成21年2月27日、二人は柳田小学校の職員室にいた。

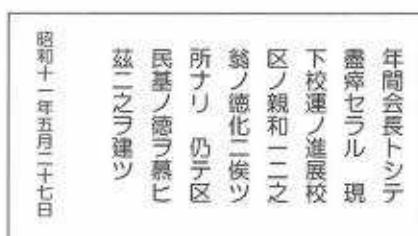
元学校図書館職員の久川さんがついているので、フリーパス状態だ。そこで、校長・教頭先生と名刺交換して、資料をみせていただいた。

調査の結果、判明したこと、課題は以下のとおりである。

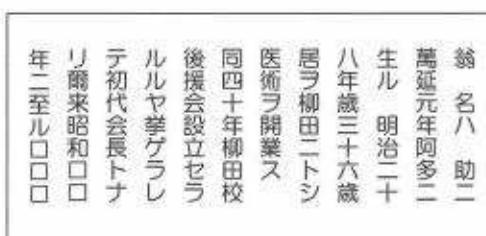
- (1) まず、「柳和会」という会議録の発見である。これは、明治42年以降昭和10年までの記録であるが、「柳和会」とは、学校後援会の愛称名であるといつていい。「柳」田の校区民が『和』をもって前進して行こうとの趣旨が実感される。なお、この「柳和」という固有名詞は、戦後設立された柳和保育園、読書運動のリーダー的存在であった柳和読書会などとして生き残っていることにも止目しておかなければならぬ。

(2) 碑文の確定ができたことである。とはいへ、石碑関係の直接的資料がみつかったわけではない。が、関連資料を読み解くと、碑文自体はつぎのように復元確定されるであろう。

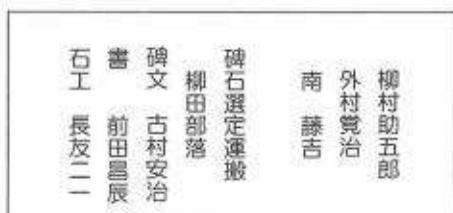
〔碑の土台左側〕



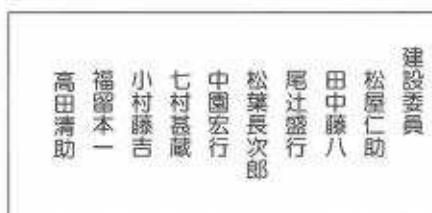
[碑の土台正面]



[碑土台右側]



〔碑の土台後側〕



このうち、柳村は次期の後援会長、古村は当時の校長である。前田は4年の学級担任であった。碑石は柳田集落の方々が選定したとあるが、どこから運搬したのかは不明である。いずれにしても、他校の事例からして、人力で運んだことはまちがいがない。

- (3) 河野の会長在職期間をどう考えるかという問題がある。というのは、市教育委員会学校教育課長からいただいた沿革史にも、またこの石碑にも、河野は明治40年学校後援会発足以来会長を務めていたと記述されているが、明治42年からの柳和会会議録によれば、その会長職は校長（入部郷左エ門）の當て職なのである。これをどう考えるかという問題である。

私は、つぎのように考える。つまり、発足時の会長は河野であったが、明治42年の段階では校長に変わったのだと。柳和会という名称もこの年代からである。事実、規約には、会長は学校長の當て職と明記しているのである。

しかし、大正10年に会則変更が行なわれ、会長は選挙での選出となった。このとき、河野は正式に会長に選出されたのである。校区民の喜びは大きく、その祝賀会には300人もの参加者が集まり、近来まれなる集会であったとされている。以後、何回が会長職の選挙が行なわれたが、圧倒的に河野の圧勝に終わっている。

それを証明するのは、大正2年に開催された会合の招集権者であること、大正5年と8年には、柳和会から表彰を受けていることである。また、大正3年には入部郷左エ門の頌徳碑が建立されているが、その碑文を創った人物が河野その人なのである。河野がいかに柳和会に深く係っていたかを我々は偲びうるであろう。このことを、現代では「顧問」としかいいえないものである。

(4) 石碑の不明確な字の意味はなにかという問題がある。先述のとおり、石碑の内容は解明したのだが、どうしても確定できぬ箇所があるのである。つまり、「昭和□□年ニ至ル□□年間」の部分である。当初、私は磨滅した字だろうと推察していたが、なんと現場に足を運んで調べてみても、磨滅ではないのである。そもそも、刻字されていないのだ。

なぜか。

私はつぎのように推定せざるをえない。

これを建立した昭和11年には、明治後半以来の河野の活躍があまりに鮮烈であったために、柳和会といえば学校後援会、学校後援会といえば、即「会長の河野」という図式ができあがっていたのではないかと。しかし一方では、どうもその間、校長も柳和会会长だった時代があったのではないかとの思いもあり、結局その期間を確定しがたかったのではないか。あるいは、文章の始まりを明治40年からとすれば、短文のなかでは会長・顧問・会長などという複雑な事情を表現しえなかつたのではないか。そのための欠字であると推定するのである。

(5) 河野の具体的な仕事は、山川の事例と大同小異である。これに付加するに、報徳会の組織化が特筆されるべきである。この運動は、管見によれば、鹿児島県では大隅地方で盛んに実践されたが、柳田の地にても、この運動が河野というよきリーダーを得て、生き生きと進展したのである。報徳会運動とは、二宮金次郎の教える「自立自興運動」の現代版である。品格ある精神の形成と地域おこしの実践である。

この運動の延長上に、柳田小学校に付設された公民学校の創立がある。あるいは、健児団の育成がある。それはまさに、戦後のPTA活動や地域子ども会活動の先駆的姿なのである。

6. 河野助二という人

河野は阿多の人である。では、彼はどういう人なのか。これが疑問である。そして、なぜ、柳田にやってきたのか、これまた疑問である。また、なぜ、それほどまでに熱をこめて地域おこしに係ったのかということも疑問である。

残念ながら、それは分らない。

分らないけれども、金峰町郷土史によれば、以下のことが分るのである。

(1) 河野家は、高こそすくないが、士族であること。阿多衆中高調査(慶長19年)に記載されているからだ。

(2) 「西南の役」戦没者の招魂社が旧金峰町にはあり、生き残った人々が石塔を造立した記録がある。実はその石に「河野助次」なる人の名前が彫られているのである。

この2つをもって、つぎのことがいえるかもしれない。

つまり、助次が助二であるならば、西南戦争が勃発したときに、河野は多感な17歳だったことになる。郷校に学んでいた河野は、西郷の影響強い若き学徒として、この戦に参戦した。しかし、「再度の維新実現」という思いむなしく敗戦し、帰省。そして、戦いに倒れた人々の御魂(みたま)を安置する招魂社設立に参画したのだと。

だが、思い破れた河野は、その後の人生をどうしたか。戦場の地獄をみた河野は何をなそうとしたか。

医学の修得である。どこで修得したか。だれに学んだか。いずれも不明である。

だが、苦節の時期を経て、やがて医院を開院することになり、柳田の地を選んだのだといわなければならない。その後、校区民の医療に係るかたわら、世直しの思いやみがたく、学校後援会活動に没頭したのであろう。

なぜ、私がかくいうのか。

実は、私とて、それほどまでに当初は考えなかったのだ。だが、碑文のなかの『盡瘁(じんすい)』という字を解明したとき、忽然として河野を理解したのである。正直にいえば、この字を、私は初め読めなかった。読めなかったというよりも、磨滅がはげしくて、字形が分らなかったのだ。だが、あれこれと思い巡らすうちに、それが『盡瘁』だということに思い至ったのである。

『盡瘁』とは、公のために全力をつくし、病み倒れることをいう。河野はこのとき76歳。ひょっとして、活動中に死去したのではないかと考えられる。この石碑をみていると、河野の面影を偲び、かつ嘆き悲しむ柳田校区民の姿さえ彷彿としてくるのである。

7. 歴史はつねに再発見

以上のこととを久川さんにかたると、「歴史って、実に奥がふかいものですね」という。

私は最後につぎのようになかたった。

「歴史ってものは、そこに転がっているものではない。つねに再発見なのだ。あなたが体験したように、だれもが、この石碑を毎日みてはいた。だが、だれ一人としてその意味を問う者はいなかった。だから、埋もれていた。実社会ではないよ。教育文化の空間たる学校でだよ。なんたることか、といいたくなる。」

しかし、ことはほど左様に、歴史は埋もれている。それをどのように再発見するか。そして、それを記録するか。さらにそれをどう後世に伝えていくか。これが問題なのだ。行政も教育現場も図書館もね。私がいま考えていることは、歴史の闇をどう突き破るかってことだ。そうしなければ、地域の魂など伝えられはしないからね。つまり、先人たちが何を愛し、何を憎み、何を生きがいにしたか、その「心のありど」をさぐることだ。そういう意味からいうと、実に歴史はふかい。おそろしいほどだ。私も、最初は河野がこれほどまでの人物とは考えていなかったが、ここまで来てしまった。認識のふかまりとはこういうことをいうのだろうね。

それともう一つ、あなたが最初もってきたメモね。『小学校は現在の柳田校区公民館のところにあった』というあのメモ。あのメモの内容はまちがいだよ。

柳田校区公民館は二月田にあり、柳田ではない。柳田は、もう少し山川寄りの地だ。ほら、柳田公民館があるでしょう、あそこだよ。かつては、そこに柳田小学校があったのだ。きっと、そこには学校跡地の記念碑もあるはずだよ。」

それを聞いた久川さんは「私、そこに行ってみます。その写真をとってきます。」という。

後日、彼女は河野翁頌徳碑の写真と移転記念碑の写真とを私に静かに渡した。

一つの課題を果し終えた顔だった。



柳田小学校移転記念碑

平成21年3月3日

一 はじめに

鹿児島大学附属図書館玉里文庫に所蔵されている『誠忠武鑑』（人の部 52 番 3281、大本、五巻八冊）は、いわゆる赤穂事件に取材した実録体の読み物である。巻四巻末の識語には次のようにある（句読点は引用者による）。

誠忠武鑑

中将公之所賜、其巻皆係

公手装而、第二巻、第四巻素闌、久封

憾其不全、因用重富邸蔵本、寫以補之、

凡五巻而、第一、第三、第五各分為上下、通計八冊

慶應紀元乙丑冬十月島津久封謹記

この識語の筆者島津久封は、島津久光（「中将公」）の六男である。本書は「中将公」（久光）の「手装に係る」もので、もともと全五巻のうちの巻二と巻四を欠いていた。それを惜しんだ久封が越前（重富）島津家にあった本を写して完本とするとともに、從来からあった三巻をそれぞれ二分冊し計八冊としたという内容である。慶應元年は西暦の1865年にあたり、その三年前（文久元年）の四月、島津久光は正式に養子先の越前島津家から宗家に復帰したが、その際、久封も久光とともに宗家に帰っている（注1）。ちなみに久封は嘉永四年（1851）十一月九日生まれ（注2）、慶應元年当時、十八歳である。

さて、上記の識語には解釈上いくつかの問題点を含んでいる。まず、「手装」という語の解釈である。久光が自身で写し、装丁（製本）したという解釈と、久光がみずから（手ずから）装丁したという解釈と二通りの解釈が可能なのである。いま、『誠忠武鑑』の本文を見るに、若い時代の久光の筆跡からするとやや流麗にすぎるようにも思われ、俄に判断できないが、久光の性格からして自ら筆を執って写したとすればなんらかの識語があつてしかるべきところ（玉里文庫にある久光自筆本には必ず筆写年・署名がある）だがそれが見えないこと、また、欠巻があるのをそのままにしておくのも不自然であることから、目下のところ論者は久光の自筆ではないと考えている。

第二の問題点は、識語からは久光の養子先には「重富邸蔵本」が存在していたことが窺えるが、それは久光の傍らにその本が存在していたことを意味する。久光はその存在を知らなかつたのであろうか。それとも知つてはいたが、写す（または写させる）ということをしなかつただけなのであろうか。

第三に、本書は久光と久封によって、少なくとも二回、装丁が施されたことは間違いないが、装丁（改装）の際に裏打ちを命じたのはどちらかという問題がある。久光が装丁を施したのは、宗家復帰前のことと考えられるが、久封の場合は復帰後のこととなる。久封が巻一、三、五をそれぞれ分冊にした。それは、次節で述べるように裏打ちを行なった結果によるものと推定するのが妥当かと考えるがどうであろうか。

二 裏打ち紙文書の出現

この度、『誠忠武鑑』のうち、久光が久封に与えた三巻（一、三、五巻）の裏打ち紙として、『越前島津家奥祐筆日記』が使われていることが判明した（注3）。本日記の題として「越前島津家奥祐筆日記」（以下「奥日記」と略称する）と称したのは、その表紙と思われる紙が存在していたからである（図版1）。

表1は、『奥日記』が裏打ち紙として使われている三巻六冊のうちのどの丁の裏に存在するかを示したものである。『奥日記』のすべての丁に裏打ち紙が施されているものの、新しい白紙が使われているものもあり、冊によって若干の偏りも見られる。たとえば、巻一に比べて巻三、五は、『奥日記』が使われている頻度が高く、しかも連続して使われている傾向が見られるようである。

裏打ち紙に墨付きのある丁を、巻一之上から順に、通し番号を付けた。この番号を、いわば戸籍のようなものとして、日記を復元することを試みた。以下、この番号を《 》で括って表示することにする。

なお、墨付きのある裏打ち紙のなかには、日記とは関係がないと思われる反故（歌の下書きのようなもの）も含まれている。墨付きのある裏打ち紙の総数は百八十丁（枚）、そのうち、歌稿などは三丁（注4）があるので、差し引き百七十七丁（枚）が今回出現した『奥日記』ということになる。

では、『奥日記』はいつごろの日記なのか。また、これがいつ裏打ち紙として（つまりは日記として保存される意味を失って）再利用されるに至ったのか。また、これが原本なのかあるいは副本なのかといったさまざまな問題

表1. 玉里文庫『誠忠武鑑』裏打紙文書の分布

冊	丁	本文一行目	裏打文書の有無	番号	備考	冊	丁	本文一行目	裏打文書の有無	番号	備考
一之下	1	誠忠武鑑卷ノ一				30	身を失ひ一ソハ母もかくなり終へは				
	2	可然候と御禁の御事なり				31	さやつづへせんいちらの事に俟かならず				
	3	との歎をいかにもいんぎんに				32	三月十五日上使内匠頭の尿敷へ				
	4	高家の後押なり然者かやう				33	おもひおもひ心々勝手の所へ				
	5	寄らず昨日左京亮體				34	御の事たり臺所に至りて見るに				
	6	事なれば承よし申入て				35	の御なり未に幾中場所の御井へ				
	7	思召候やと尋しかば津井				36	近くあゆませ寄しに三郎左衛門				
	8	其職に於ても且重し				37	なり御切腹うたかひなしとそんして				
	9	浪野内匠殿音物を決り				38	拂ふて座を告げなつめる胸を				
	10	欲之思召の發も千萬痛入				39	御禁の御事故未明よりして				
	11	御報として身上相應の御用				40	なり五ちへしとかくに善悪御用度				
	12	招き兵万名はまにと御尋なり				41	の達者ならぬものへからす				
	13	踊り上りて優ひいきまれし	○	1		42	庄田下総守殿御目付多門傳八郎				
	14	一年龜井能登守殿使御馳走役	○	2		43	源五右衛門述藤瀬四郎				
	15	急して御氣運かなるべし又明日				44	某始同心せず然れども内蔵助				
	16	波山成に氣も心も乱れ玉ふ				45	望て罷出らるへしと無双の御忠節				
	17	裏只中をと差向われし手もなまわ				46	多門月岡江戸下向の事				
	18	彼が威猛に對おくれ遊ばけるにやせ				47	の城の東の方の御門はるかの軒下				
	19	よろこひ十分すまし候と立帰る	○	3	天地逆	48	數もせす取込んでくひ逢ふ有様				
	20	五寸の御刀を取て引兼居合縛に				49	たる了縛の主て律儀におはして				
	21	此方よりして露手向ひ杯申上ル	○	4		50	十四(七)日老中より御内意				
	22	しは吾禁制取成りと墨石けられ	○	5	天地逆	51	四年二月廿一日城取の御内意				
	23	上野介御家の百世迄命の御恩忘				52	頗は自身の體に勿論				
	24	人柄には奇らんものにて思ひの外	○	6		53	篠城する程ならへ誠に御退治				
	25	にてあやまり給ふ事寧ニはあらねども	○	7	天地逆	54	ていひへせん此供奉かへさんや				
	26	如くなきて亡果大野郡右衛門は	○	8	天地逆	55	上急也殊更誠受取の高人出立				
	27	中間小者想合八百余人傳奏屋敷				56	出立の時にて是上にも及ぶ				
	28	出されし狩野が篠城の解顔を見て	○	9		57	三月十九日 浪野内匠頭家系				
	29	あれはまたに上野介是を改むへき				58	上る鬼の器量なりや但しハ采女正				
	30	量の表かへ申付しとせ来り	○	10	天地逆	1	小山進藤奥野等割除きの事				
	31	御傍參相濟御兼克御僧館				2	かみ様又御のものにも腰かいとそやし				
	32	有ていらせらる内匠頭殿奥に御し				3	罷城中賤侯例自分の事に於てハ				
	33	は冬からもの也是世の人の習ひなり	○	11	天地逆	4	へし我々におひては早々とて選別				
	34	者とへ内匠頭省不存心者ての無禮				5	いかゞ成しや英翁の事を知す				
	35	專一に利と育ふとき長矩取あへす	○	12	天地逆	6	半事にて有二人の勇士ハ選別を				
	36	御生寄に相付まされる夢遠州園招て				7	樂前の隨り内藏助中日はるへ				
	37	あらず美作勝連山陰八萬石の主	○	13		8	千賀不破賣谷中村近松などさへ				
	38	心を尽し盡りせらるるものとありに				9	ことごとく來り集りに入り内蔵助も				
	39	の用意などしてあしたになると				10	あやまるべしこれハ重も負も有れ				
	40	もなく過畜て男のふりく所を	○	15		11	用意にひしと組定申候式拾八斗も差下し				
	41	何者にや見申ス内に少人の又跡	○	16		12	にて病氣と仰て江戸表へま下り				
	42	しより資糧の心し願え家中の				13	表の面々内蔵助工面宣しま事を聞て				
	43	足されしか日與五郎仰極の事有とも	○	17		14	も抱心ほそく何とぞ性氏いやしからぬ者				
	44	好て朝夕手荷字文をうどみ				15	いかでか仕る要多くせん又三郎左衛門				
	45	たり飯豊溝の者共赤穂の城下の				16	若牛の差詰たる気性に思ひ詰て				
	46	風五郎かく下死人をして太郎助を				17	僕へ三平にいかゞせしや曾のまゝ音もなし				
	47	なして殊に牛れつ後の感有て				18	一筆申産儀規も遣者幾去年				
	48	名も改め行堅與三郎と名乗する也	○	18		19	主・我瀬尾孫左衛門嘉通計幸七				
	49	もといとひけれども思臣のする所に	○	19		20	聞人船かずと云事なはつて世上の				
	50	御事に候て何にても手にあひ申やふ				21	有て延引せり正月廿五日内蔵助				
	51	季るに免角御怒りを含まるとの由	○	20		22	の三人ますます見かぎり今年の正月				
	52	打栗さん夢けいわくと思ひ返して				23	に成りぞ招て長助最期近に				
	53	偏に無位無官の平士といふとも				24	申すものならバ死手の本擲何事か				
	54	胸中剛けに射箭を難。有自出度	○	21		25	忽に身まかりぬ内蔵助大にかなしみ				
	55	入給ひか十三日には未明より御登城				26	寢斗らひ申べしとて五十日の後に				
	1	知る所也されはこそ大石内蔵助を	○	23		27	内蔵助元へ催促する内蔵助これぞ				
	2	左京亮體は其兩脚右腰掛下りて	○	24		28	年内二も存せし故事を果すへ三月中				
	3	なり上野介は珍教ほどの過言の入	○	25		29	思へばてへ忠臣のする所にあらず				
	4	腰の筋も又僅かされども元より				30	思もに千賀三郎兵衛にハ赤穂の左往				
	5	守る此時御同朋關久和と言もの				31	端たる然らへ早速其御用意有て明日				
	6	いなやとしむり時に勤使御原大納言	○	28		32	本意を達せバ先よしと覺悟して				
	7	氣を告んと馬をはけて御館御館に	○	29	天地逆	33	面々のあたりに見し事なれバ				
	8	八人數を圍め引退てたち並ぶ		30		34	用談あり誰か此度内蔵助の名代に				
	9	能雀守氏真しるべしの御事にて	○	31		35	しく行候方貴公外になし				
	10	既に癒着を加へ本服の後相替す				36	被、成候如く大石内蔵助殿元古				
	11	不便の夢也早々丹後守羅威	○	32		37	あらす夢に候て偽り或ハイカズ事				
	12	の中にて言語を絶たる無禮過言	○	33	天地逆	38	さざざの評定有しかゞも同意の面々に				
	13	やうに參・願候と謹て被仰上				39	食しり三ツ迄食し綴りて一ソハ残れり				
	14	口面を取つしんて田村殿の御館				40	事にあらずはたと忘れたる事有りて				
	15	御開有て早々田村殿の庭に至り玉ひ				41	心はれ寝び此うへなしして御殿に入				
	16	といふまだ乳さす道て可し考				42	なしこれ母がながらへあるゆへと思ひ				
	17	うらやますといふ者なし然れども内匠頭				43	別れ申たり候、之心ならず延引申たり				
	18	久和世上の評判にし准ふ理に	○	34		44	として下オへき事也いかへあらんと				
	19	萬にこそそんし儀へ最毒危き申	○	35		45	引揚申候て下向度又同窓の面々				
	20	有之先と使下総守殿脇八郎殿に				46	なりざりしに身不肖の某を入致し				
	21	を始めとして至て御別れをや惜シまれけん				47	せしに大勢の中にて大高麗音ハ				
	22	折に叶ひてとあはれなり				48	此時京都ゑ下り茶人に山田				
	23	委難心得たりとて廣義に入し辰				49	田舎の如くきてて因り入ル上し何様				
	24	有事なるを上使として不譲法				50	弟子の中二て功者のあらばちと同道				
	25	万一御同心なくは御清京有て				51	餘間認骨中條五三日中又々御見習				
	26	安藝守光風御二男は正位下因幡守				52	乱入せしハ北山田宗義の物たり				
	27	さかへ目出たかし剣橋州赤穂の				53	中入候と有しかば称義衛源五右衛門				
	28	かのける事とも也				54	事なしと連かに受合しかば三人大に				
	29	夢願にて胸元をさし通して血に染て				55	角やしき二方見せに寄て先片店ハ				

表1. 玉里文庫『誠忠武鑑』裏打紙文書の分布

冊	丁	本文一行目	裏打文書の有無	番号	備考	冊	丁	本文一行目	裏打文書の有無	番号	備考	
三之上	56	其事にてハなし御墨戻の格式を存候	○	67		五之上	8	被下し御支度の用意いたし置たり				
	57	ならへ委しくやうを見る折役人出て	○	68			9	倉橋傳助赤坂源藏晴田又兵衛				
	58	町人の相手など御武家様方の御格式	○	69			10	坂で塗内する伯耆守殿取次桑名万右衛門				
	59	いたゞきもてなしけれハ彼下人大に	○	70			11	中中あがらず十足に御座候とて				
	60	しらひもてなしけれハ此男も与五郎	○	71			12	夜中相はたらきよづ友慶の時分なる				
	1	夜中にても自かの御墨敷孝正織	○	72	天地逆		13	これへ義士の聲の中衣服のあいだ	○	127		
	2	何しに命なり合ひよひ申され民の	○	73			14	御打くつろぎ被成べしとて	○	128		
	3	敵くへしときしもの金右衛門胸にせきくる	○	74	天地逆		15	よく成程えの事也かわておもて詰し				
	4	工夫成しきやと頼めハ金右衛門	○	75			16	廢し今少し御墨館御庭引有ルベシ				
	5	同意の面々聚集きて並頃の友	○	76	天地逆		17	伯耆守殿出申候とて西拾七人の姓名				
	6	志のすつな裏とから頃な跡にて	○	77	天地逆		18	難くや思し召けんとかく相考へ	○	129		
	7	當し走り再び來らば十三日十四日	○	78	天地逆		19	警戒大事に被存べしと被仰商けれレバ				
	8	さ走き陸家の人いきめすかし	○	79	天地逆		20	政みだし某も謀手を負引入り申候内	○	130		
	9	招きたりこれへ近き内に主兵を先達而	○	80	天地逆		21	うしなひ給ふのみならず希代の家人	○	131		
	10	内蔵助あへて恨ます才子専也内蔵助	○	81	天地逆		22	御小人目附杉田五左衛門に御小人	○	132		
	11	然れども若年の豪傑とも心元なく存候	○	82	天地逆		23	中渡しければ四拾余人の面々持合	○	133		
	12	源五兵衛方川魚名物也殊ニ吉田鬼	○	83	天地逆		24	昇令をたゞしたりそれより三田へ出て	○	134		
	13	王税事泉下の供申付候可「被」易	○	84	天地逆		25	面にて今朝より入候まで御門どめ	○	135		
	14	面々ハ誠に五反新小割へんくつにて	○	85	天地逆		26	御足を洗へられこれへ御手に被成べしと	○	136		
	15	江戸表へ大二郎を同道し御評定所に	○	86	天地逆		27	御三人此外に御小人目付衆着座	○	137		
	16	身の上ほど誠に意なる裏あらじと	○	87	天地逆		28	申候成に今朝に到りてハいへくへ	○	138		
	17	物語にて大かた承知致し御重も角も	○	88	天地逆		29	其崩斗りがたし取こひねんごろに	○	139		
	18	燒したり是おして同意の義士	○	89	天地逆		30	古田忠左衛門原宗右衛門				
	19	用意したり腰の物の類は又					31	狂行右に向し都合勢五百余人				
	20	拙者の存る所ハ此地を以て亡君の					32	坊主戎野春香筋本松竹等出				
	21	金なりとて金子百両取出し持たり	○	90			33	たきの上し申候れどもわたさず	○	140		
	22	内證不足も致候ハ御領も申上べき	○	91	天地逆		34	△これを見て候む古今に例もなき	○	141		
	23	として同意の妻いつれも發行の落選	○	92			35	耳舟近隣のものなど此徒の者を吉良	○	142		
	24	もの斗らひにて内蔵助妻を直りしが	○	93			36	候ひつらんとていかにも取しづめたる				
	25	尋ね来るべし名残こそ情しげけれど	○	94			37	無双の義士言へし				
	26	したり備前の池田玄蕃ハ三万石の	○	95			38	外の事にてさま主の御厄苦掛				
	27	申さハ勇士の御身にも非ず殊更内匠	○	96			39	被下候と申候付越中守殿御目見	○	143		
	28	有しも同じ裏唯今の御心底にてしかじ	○	97			40	御縛御被露ねがひ奉り篠と長障右	○	144	天地逆	
	29	申てもはや会日もなし系月四日	○	98	天地逆		41	もてたゞし存するやうに被御て御座	○	145	天地逆	
	30	事により品に寄て兄の事なれば	○	99	天地逆		42	をいたし武家の手本と感し	○	146		
	31	潮左衛門同愛せず清四郎氣色を述べて	○	100	天地逆		43	かたがた仕候に依て半太夫心をくれ	○	147		
	32	申難し夜之父高兵衛も家断續ハ	○	101			44	父内蔵助にハ昨夜伯耆守殿にて最期	○	148		
	33	早々御端宅者ルへしと申渡されば	○	102			45	二叶玉菜の怪病にて其間其間に	○	149	天地逆	
	34	萬勇仲崎と五郎両人の斗事にて	○	103			46	ふけり食事ハ何れも飯二碗をかぎり	○	150	天地逆	
	35	御機嫌能御到着誠に目出度奉 ^{イダ}	○	104			見返			○	151	
	36	高田軍兵衛変の事	○	105			1	越中守殿内記號に御向ひ	○	152	天地逆	
	37	云軍兵衛申けるハとかくハなし拙者	○	106			2	物かたりまくへしと宣ふ内蔵助始め	○	153	天地逆	
	38	なれば御沙汰候、下走し去年亡君					3	奥岳寺より送りし御手を拂て	○	154	天地逆	
	39	苦さん氣色也					4	候段却而多奉存候て御意の盡き	○	155		
	40	やうやう止めて待給へさやうの					5	坊主夫より段々と歳暮の御札	○	156	天地逆	
	41	いや、や堂来なし東明日扇部元に					6	しく御縛申上初泉寺の方に向ひ	○	157	天地逆	
	42	れり忠臣の義士ならば茅野三平が					7	がたく奉存候と申上る初	○	158	天地逆	
	43	小平太に似たる者行進ひしが常会					8	貢酒 一升干菓	○	159		
	44	致石衛門が相手に不足の手利也と					9	夕に及び退出すとおもひし所へ	○	160	天地逆	
	45	をなして赤穂へ至り京都へも到り					10	勤命被仰付とも存生いたすべき者一人	○	161	天地逆	
	46	成て泰公の口をもゆるゆると聞立					11	仕候て職に夢などを頂と仕候事	○	162	天地逆	
	47	佐右衛門の情も深しこれをよひ事	○	107	※歌稿?		12	思召候んとぞ入奉存候御序の跡	○	163	天地逆	
	48	ちまと罷帰るやうに急ぎ参るべしと	○	108	※歌稿?		13	料理酒を出し細細の物語二時	○	164	天地逆	
	49	羽織着て甲頭山これへ大石内蔵助	○	109	天地逆		14	上意の趣者中被仰道候				
	50	助平のこせし鳥目を増膳へ差して	○	110	天地逆		15	瓶酒				
	51	妻具して常に景を挙せしよかや	○	111	天地逆		16	右之通りて長岡監物羅出て				
	52	前原伊助の許に至りて内蔵助の	○	112	天地逆		17	一さしし 《杉地祇くま甚 親子付 かまたひ》				
	53	十兵衛やがて譲てこれを見るに	○	113	天地逆		18	よつて打綱不 得御當某どもへ宣もてなし				
	54	仕てに直助と云者夜中に室内の娘子	○	114	天地逆		19	三				
	55	なれども事を諂ひと思ひての事也	○	115			20	一隠 ^{モチ} 多井彌 ほね きんかん/				
	56	拙者立がたして去べき氣色更になし	○	116	天地逆		21	一者 斎島青く	○	165		
	57	萬一了簡違ひなど致 ^{スル} 蘇州にて生害	○	117			22	職にこれ後の職と忍召あきらめ候様	○	166		
	58	きして急ぐ内蔵助申渡せし如く大学駿へ	○	118			23	十二十三の坊主をやうやうとだまして	○	167	天地逆	
	59	早速申上げれハなづかしかりけるに	○	119			24	夫より以前ハ落漆の気色も祈々有しが	○	168		
	60	も數行の落漆に及ぶやう有りて婦人	○	120	天地逆		25	誠忠武鑑卷之三十八				
	61	むせび ^{スル} 御前立をかねし ^{スル} 瑞泉院	○	121			26	かくしく思ふべし文通など被度存候ハ	○	169		
	62	光鳳鏡をつづ竹林唯七隆重切臥	○	122	※歌稿?		27	くもり行方の御縛御通報 ^{スル} 有き余りに	○	170	天地逆	
	63	老女中早速乗出して泉居寺へ到り	○	123	天地逆		28	新井備三郎雄石右衛門也柳を蒙りて	○	171	天地逆	
	64	御首と存候あつはれ御手柄の種	○	124	天地逆		29	同じ事也十七人の介錯人細川家にては	○	172	天地逆	
	65	昨二日の夜より至りて來會するぞ	○	125	天地逆		30	四十五歳也其原自ふそに押立てくわんに	○	173	裏向き	
	66	致のこして人の目に立ん物いと見ぐるし	○	126			31	日ぞや元禄十六年二月四日	○	174		
	1	誠忠武鑑卷之三十三					32	義照院を兵衛兼尾向儀の守義實	○	175		
	2	してとぞなる者なしきすが謹奥守殿					33	長年の十三回のよい懇に正徳四年	○	176		
	3	宣御申候可後下とのべしきハ					34	ことことく召出され三百石以上の以下と云ハ	○	177		
	4	て唯今人數理出し申候とて大歎を					35	たつてとりかみゆきひの聲察々にみちみち	○	178		
	5	禮嵩口などを取てさしかためたり					36	《足輕頭》奥田保太夫 《二百石/五十七歳》	○	179		
	6	三ヶ月跡に被し下 ^{スル} 齋侯吉光の御刀					37	《痛問委》貝賀左衛門 ^{トナ} 十三人扶持/五十四歳	○	180	天地逆	
	7	にて御免遊はされ職に身の面目申上										

が浮かび上がってくるが、本稿では『奥日記』の年代判定と内容の紹介を中心に述べていくこととする。

三 『奥日記』の年代判定

まずは『奥日記』の年代を特定する作業から始めることにする。

図版にも掲げたが、幸いにも『奥日記』の表紙の一つが残っていた（図版1）。これによって「文化六年」（1809年）のものが含まれていると判断し、次の作業に取り掛かる。

日記の本文は、図版でもわかるように、字も大きくゆったりと書かれており、概して簡潔な記述が多い（図版2）。一丁あたり、二日から三日分の記述があることも稀ではない。こうした記載の性格を踏まえ、日付の書かれているものを集め、日付の順に並べていく作業を行なった。すると当然、同じ日付のものが現れることになる。たとえば三月十七日の日付を含む二枚—《120》と《174》—を次に掲げる（注5）。

【資料1】《120》

弥十七日晴

- 一 御機嫌よく御目ざめ被遊候。奥様御事、今日垂水御屋敷、入来御屋敷、宮ノ城御屋しき、義岡殿、信濃様御方江、當年ハ初面御出あそハし候。
- 一 萩原の天神様江も御参けいあそハし候。

【資料2】《174》

- 一 今日、よね事ばば病氣にて五日の御いとま申上、下り申候事。

とうはん しつ、やす

三月十七日雨天

- 一 今日何事もなく。

とうはん りつ、つな

三月十八日半天

- 一 今日昨日之通。

當はん しつ、りつ、やす

両者を比較すると、月日の書き方、当該日の最初の記述（注6）、当番の女性の名の記載の有無など、記述の仕方に異同があることがわかる。特に当番の記載を勘案して日付順に紙を集め並べていくとおおよそ二つの群に分かれることがわかった。そして、二つの群の年代を確認するために記載内容を検討していく。その具体的方法としては、法要など冠婚葬祭の記述や、年中行事の記述、さらには月の大小を考慮して年代を判定する。まずは、法要の例を挙げる。

【資料3】《155》《177》

三月五日雨天

- 一 今日垂水京徳院様御三年忌御法事ニ付、御隠居様、旦那様、鞠負様、於珍様御かんきん□江御参り被遊、はやく御帰り。此節、真幸事登りニ付、御かね共拝領被仰付候ニ付、今日何れも様へ御膳進上申上候。また何れも様合御せんへつ共被下、御銘々様合御せんへつとして、色々被下候事。

とうはん たき、とわ、りつ、よね

垂水島津家の「京徳院様」の三回忌の法要に旦那様、鞠負様、於珍がお参りをしたことが見えている。旦那様とは当主の島津忠寛（後、忠貞）、鞠負様とはその弟の久倫、於珍は妹である。「垂水京徳院様」とは垂水島津家第十代貴澄のことである（1807年）（注7）。これにより、《155》《177》は、文化六年の日記であると推定することができる。また、先に述べた当番の記載がある一群は文化六年のものである可能性が高いことになる。

次は暦から年代を推定（確認）する。

【資料4】《111》

四月三日晴

- 一 御機嫌よく御目ざめ被遊候。今日八十八夜ニ而、御茶取御ざ候。……

【資料5】《145》

三月十九日せい天

一 今日八十八夜ニテ、御茶取御ざ候。……

【資料4】【資料5】はともに、当該日が「八十八夜」であることを記載する。『増補日本暦日便覧』(注8)を参照して文化六年の八十八夜がいつであったかを確認すると、文化五年十二月二十一日が立春であるから、八十八夜は三月十九日になる。したがって《145》は文化六年の日記と推定できる。同様に四月三日が八十八夜に当たる年は、文化十年(1813)であることが判明する。この年は正月五日が立春であった。したがって、《111》は文化十年の日記であると推定できる。

記載内容から、文化六年、文化十年のものであると推定することができるもの（隠居忠教の五十の賀の件や、島津重豪のお国入りの件など）を表2にまとめておいた。◎で示しておいたので参考されたい。

こうした行事や暦などから年代特定をする作業をした後、形式によって分けた二つの群が、一つが文化六年、もう一つが文化十年のものであることを補強するために、月の大小を見ていくことにしたい。二つの群のうち、月の最後の日（晦日）の日記が残っているのは、次のとおりである。

〈文化十年〔推定〕の群〉

三月三十日（大） 《112》
四月二十九日（小） 《88》
五月二十九日（小） 《72》
七月三十日（大） 《5》
八月二十九日（小） 《96》
九月二十九日（小？） 《10》

〈文化六年〔推定〕の群〉

二月三十日（大） 《150》
三月二十九日（小） 《169》
四月三十日（大） 《132》
七月三十日（大） 《156》

前掲『増補日本暦日便覧』によれば、文化六年の大の月は、「正月、2月、4月、7月、9月、11月」であり、一方の文化十年の大の月は、「正月、3月、7月、9月、10月、11月、12月」である。ここで一つの難点が現れた。それは、《10》の九月二十九日が晦日であるとすると、《10》は文化六年のものでも十年のものでもないことになる点である。十月朔日は《14》であり、両者がつながっているかどうかが問題となる。以下に引用してみる。

【資料6】《10》《14》

九月廿九日晴

一 御機嫌よく御目さめ被遊候。昨日之御礼御本丸江被仰上候。於多か様御事、鶴江崎江御出被遊候。
一 安藝様より御文ヲ以、旦那様御事、少々御風氣ニ被為入候段被為聞、いかか被為入候哉、御左右御尋被仰進候。
一 まい竹 一かこ 」《10》
一 ひらこ之内 なし かき
御到来あそハし候由ニ而、

大御隠居様より 旦那様江 御文ニ而御いたたきあそハし、即御請ニ而御札被仰上候。御拝領之御さかな、今晚御ひらき上ル。奥様ひら江御出、夜ニ入御帰り。

十月朔日せい

一 御機嫌よく御目さめ被遊候。旦那様御登城被遊、夫より五本松江御上りあそハし」《14》

「大御隠居様」(島津重豪)から贈り物が届いたのであるから、《14》の記事は文化十年とするのが相応しい。もし《10》と直接つながっているとすると、晦日の記事がないという矛盾が生じてしまう。祐筆が晦日（三十日）をつけ忘れたとするほかはなくなるのである。重豪（御隠居様）から「御拝領の御さかな」という書きぶりからして、色々な種類の贈り物があったような印象を受ける。つまり《10》と《14》との間に少なくとも一丁の日記が存在していたが、今は失われてしまったと考えるべきなのではないか。

しかし、そうは言っても文化六年、十年以外の日記が混入している可能性は否定できない（特に文化十年と推定した分）。ごくわずかな数だと思われるが資料を扱う際には注意を要する。

これまで『奥日記』の年代が、文化六年、文化十年の二つにはほぼ絞られることを見てきた。ただし、これは日付の入っている丁を対象としたものであり、日付が入っていない丁のうち内容から年代が確定できるものを除く二十枚程度があることを断つておかなければならない。

表2『越前島津家奥祐筆日記』の復元

【推定:文化六年】		年代判定の根拠となる事項	番号	日記の月日	日記の月日	年代判定の根拠となる事項
番号	日記の月日					
58		◎表紙「文化六年...」	113	(三月二十八日)・三月二十九日		
59	正月元日		112	三月晦日・四月朔日	○三月=大の月	
67	(二月四日)・二月五日	◎婦女子絶縁禁止(吉田)ハ女お前の仕事ニ正月始む	111	四月二日・四月三日	◎八十八夜(文化10年の八十八夜=4月3日)	
56	二月六日・二月七日	◎忠實、役年(厄年)の矢数	110	(四月三日)・四月四日		
55	(二月七日)・二月八日		109	四月五日・四月六日		
56	二月九日・二月十日		108	四月七日・四月八日		
63	二月十一日・二月十二日・二月十三日		105	(四月八日)・四月九日		
52	(二月十三日)・二月十四日・二月十五日		104	四月十日・四月十一日		
51	(二月十五日)・二月十六日		103	四月十二日・四月十三日		
48	(二月十六日)・二月十七日	◎島津伸の妹との縁組	118	(四月二十日)・四月二十一日		
47	(二月十七日)・二月十八日・二月十九日		92	(四月二十一日)・四月二十三日		
46	(二月十九日)・二月二十日		91	(四月二十三日)・四月二十四日		
45	(二月二十日)・二月二十一日	◎島津伸の妹の滞在	90	(四月二十四日)・四月二十五日		
44	(二月二十一日)・二月二十二日		89	(四月二十七日)・四月二十八日		
38	(二月二十二日)・二月二十三日・二月二十四日		88	四月二十九日		
152	二月二十五日・二月二十六日	○「忠穂、たの中へ出でてお出」(尼平の二十六夜待)	93	五月朔日・五月二日		
154	(二月二十六日)・二月二十七日・二月二十九日		87	五月三日		
153	(二月二十八日)・二月二十九日		86	五月四日		
149	(二月二十九日)・二月晦日	○二月=大の月	85	(五月四日)・五月五日		
150	三月朔日		84	(五月五日)・五月六日		
178	三月二日・三月三日		83	(五月六日)・五月七日		
179	(三月三日)※		82	五月八日・五月九日		
155	三月四日・三月五日	◎唐衣京姫院三年忌(嘉永貞治後=文化4年3月5日)	81	五月十日・五月十一日		
177	(三月五日)・三月六日		80	(五月十一日)・五月十二日		
148	(三月六日)・三月七日	◎忠實、役年(厄年)の矢数	79	(五月十二日)・五月十三日		
176	(三月七日)・三月八日・三月九日		78	五月十四日・五月十五日		
147	(三月十二日)・三月十三日		77	五月十六日・五月十七日・五月十八日		
175	三月十四日・三月十五日		76	(五月十八日)・五月十九日・五月二十日		
146	(三月十五日)・三月十六日		75	五月二十一日・五月二十二日・五月二十三日		
174	(三月十六日)・三月十七日・三月十八日		74	(五月二十二日)・五月二十四日・五月二十五日		
145	三月十九日	◎八十八夜(文化6年の八十八夜=3月19日)	73	(五月二十三日)・五月二十六日		
180	(三月十九日)・三月二十日・三月二十一日		72	五月二十七日・五月二十八日・五月二十九日		
144	(三月二十一日)・三月二十二日		71	六月朔日・六月二日		
173	三月二十三日・三月二十四日		70	(六月二日)・六月三日・六月四日		
143	(三月二十四日)・三月二十五日		69	(六月四日)・六月五日		
172	(三月二十五日)・三月二十六日		68	(六月五日)・六月六日		
171	(三月二十六日)・三月二十七日・三月二十八日		67	六月七日・六月八日		
170	(三月二十八日)		66	○七月二十一日・七月二十二日		
169	(三月二十九日)・三月二十九日		65	○七月二十二日・七月二十三日		
142	(三月二十九日)・四月朔日	○三月=小の月	64	○七月二十三日・七月二十四日		
141	(四月朔日)・四月二日		63	○七月二十四日・七月二十五日		
140	(四月二日)・四月三日		62	○七月二十五日・七月二十六日		
168	(四月三日)・四月四日・四月五日		61	○七月二十六日・七月二十七日・七月二十八日		
167	(四月五日)・四月六日・四月七日	◎役年の日持ち	60	○七月二十八日・七月二十九日		
166	(四月七日)・四月八日・四月九日	○忠實の死(吉田)西郷御用掛牌中止(嘉永6年4月9日)	59	○七月二十九日・七月三十日・八月朔日	○七月=大の月	
139	(四月九日)・四月十日・四月十一日		58	(八月朔日)・八月二日		
165	(四月十一日)・四月十二日・四月十三日		57	八月六日		
138	(四月十四日)・四月十五日		56	○八月九日・八月十日		
137	(四月十五日)		55	八月十六日・八月十七日		
136	四月十六日・四月十七日		54	○八月十七日・八月十八日		
135	(四月十七日)・四月十八日・四月十九日		53	八月二十六日		
134	(四月十九日)・四月二十日・四月二十一日・四月二十二日		52	八月二十九日・九月朔日	○八月=小の月	
164	(四月二十二日)・四月二十三日・四月二十四日		51	○九月朔日		
133	(四月二十四日)・四月二十五日・四月二十六日		50	九月二日		
163	四月二十七日・四月二十八日・四月二十九日		49	九月三日・九月四日		
132	(四月二十九日)・四月晦日・五月朔日	○四月=大の月	48	九月四日・九月五日・九月六日		
130	(五月朔日)・五月二日・五月三日	○三日・玉樹院様月免日	47	九月七日		
131	(五月三日)・五月四日・五月五日		46	九月八日・九月九日		
102	(七月十八日)・七月十九日	◎寛二郎振袖下りにつき内蔵	45	九月十日・九月十一日		
101	(七月十九日)・七月二十日・七月二十一日		44	九月十二日・九月十三日		
100	(七月二十一日)・七月二十二日・七月二十三日		43	九月十三日・九月十四日	○大御腰尾様(重豪)忠児島入り	
50	(七月二十三日)・七月二十四日・七月二十五日		42	九月十四日・九月十五日		
49	(七月二十六日)・七月二十七日・七月二十八日	○二十八日・諫訪祭	41	九月十五日・九月十六日		
157	(七月二十八日)・七月二十九日		40	九月十六日・九月十七日		
156	七月晦日・八月朔日	○七月=大の月	39	九月十七日・九月十八日		
159	(八月朔日)・八月二日・八月三日		38	八月二十日		
161	(八月三日)・八月四日	○三日・智敏院の日柄(命日)	37	○八月二十三日・八月二十四日		
160	(八月四日)・八月五日		36	八月二十九日		
66	(八月五日)・八月六日・八月七日	◎役年(厄年)の日持	35	八月二十六日		
65	(八月七日)・八月八日・八月九日		34	八月二十九日・九月朔日	○八月=小の月	
37	(八月九日)・八月十日・八月十一日・八月十二日		33	八月十六日・八月十七日		
162	(八月十二日)・八月十三日	◎範之進(斎宣九男)の夭折	32	八月十七日・八月十八日		
129	九月五日・九月六日・九月七日		31	九月二十九日		
94	九月九日		30	九月二十九日・九月三十日	○大御腰尾様(重豪)よりお土産物	
99	(九月二十一日)・九月二十二日・九月二十三日		29	九月二十九日	○御腰尾様(忠教)五十歳の誕生日	
98	(九月二十三日)・九月二十四日・九月二十五日		28	九月二十九日		
【推定:文化十年】			27	九月二十九日		
120	三月十七日		26	九月二十九日		
123	三月十八日・三月十九日		25	九月二十九日・九月三十日		
126	三月二十日(注)		24	九月三十日		
125	三月二十一日・三月二十二日・三月二十三日		23	九月三十日・十月一日		
117	(三月二十四日)・三月二十五日		22	九月三十日・十月二十一日		
116	三月二十六日・三月二十七日	◎伊千院南右衛門・大崎下り	21	九月二十九日		
115	(三月二十七日)・三月二十八日	○若狭謙(忠公)の縁組	20	九月三十日?	○大御腰尾様からの御来物	
114	(三月二十九日)	○貢豚の縁組	19	十月二日		

(注)「四月二十七日」は2回記載されている。

四 「奥日記」から見えてくるもの

『奥日記』は、現在の鹿児島市春日町に四千三百坪余りを占めていた越前島津家の上屋敷（鼓川邸）の奥の毎日を、祐筆（右筆）が記録したものである。

越前島津家（注9）は、島津忠久の子忠綱を祖とする。忠綱は守護代として越前国に赴き、のちには播磨国へ地盤を移した。天文三年（1534）播州朝日山の合戦で十五代の忠長が戦死したため、当家は衰退した。近世に入り、寛文年間にその子孫が相伝の文書を携え、薩摩藩に至る。その文書をもとに、元文二年（1737）三月、藩主の父吉貴が二男忠紀に文書と所領一万石（姶良郡重富郷）、城下鼓川に宅地を与え、再興させた。

『奥日記』には、当主をはじめとする越前家の人々の日常生活、あるいは年中行事や冠婚葬祭など晴れの日の模様、仕えている奥女中や客の出入りといったものが記録されている。江戸屋敷の模様を伝える資料は少ながら紹介されている（注10）が、地方の上級武家の奥日記は珍しいのではないかと思われる。紙幅の都合上、全文の翻刻は別の機会に譲らざるを得ないので、本稿では年代判定の際に言及した部分もあるが、重複をいとわず、日記の内容を紹介していく。

その前に越前（重富）島津家と『奥日記』に登場する主要な人物について述べておくことにする。表3は当時の越前島津家の人々について簡単にまとめたものである。他家に嫁いだ人物も含め、「源姓越前島津正統譜抜萃」（注11）をもとにして作成した。

十六代当主忠紀の長女於冬は宝暦九年（1759）四月八日生まれ、文化六年当時五十一歳。安永三年（1774）に島津直衛久芳の室となり、天保五年（1834）十二月十四日に没、享年七十六。於冬は『奥日記』の中では院号の「鏡月院」で登場、「恵鏡院様、鏡月院様被為入、夜ニ入、御立被遊候」（文化六年八月十三日）などしばしば越前家に出入りしている。

忠紀次女の於衛は宝暦十一年（1761）九月四日生まれ、安永七年に北郷賀門久定に嫁し、文化六年当時四十九歳。弘化三年（1846）閏五月二日没、享年八十六。於衛も「林昌院様」として、『奥日記』にしばしば登場する。

三女の於金は、宝暦十三年（1763）三月十七日生まれ、天明五年に川上右市久柄に嫁し、文化六年当時四十七歳。天保十四年（1843）八月六日に没、享年八十一。於金は、文化六年の『奥日記』においては「於金」、文化十年の日記には院号「桂昌院」で登場する。文化六年末から文化十年初めの間に夫と死別したものと推測される。於金も二人の姉以上にしばしば実家に出入りするとともに、越前家の人々も於金のもとを訪問している。また、於金は甥の忠寛（忠貫）の妻の「御まゆ御はらい」の際、眉をとる役を引き受けていることが知られる（文化六年二月二十八日条）。

忠紀の嫡男で、上記三姉妹の弟にあたる忠教は明和元年（1764）九月十九日生まれ、文化六年当時は四十六歳である。壯之助、若狭、周防と称し、享和元年（1801）十月九日に家督を子の忠寛（忠貫）に譲り隠居、隠居後は虚舟、鶴遊と号した。『奥日記』では「御隠居様」として登場する。正室は垂水島津家十代貴澄の女（於道）である（注12）。於道は明和三年（1766）二月一日生まれであるが、享和三年（1803）閏正月十日没。法名、法薰院殿心一華鮮大姉。文化六年当時は既に故人であるが、於道の母である島津左衛門久甫女は健在で、『奥日記』にも「慈誠院様」として登場する（後述）。彼女は文政七年（1824）八月七日に八十九歳で亡くなるので、文化六年当時七十四歳であった。なお忠教は隠居後、領地の重富の隠居屋敷に住んでいたようで、『奥日記』では、日帰りで鹿児島と重富を往復することもあった（注13）。

忠紀四女の於納は明和三年九月二十九日生まれだが、翌年夭折している。

次に忠教の子どもたちの世代に目を向けてみる。

長女の於許（於立）は、天明四年（1784）七月十三日生まれ。寛政十一年（1799）七月十三日に樺山權左衛門久言に嫁す。享和三年（1803）九月二日に二十歳で没。『奥日記』には命日の記事や墓参りの記事が出る。於許の夫、樺山權左衛門は文化朋党事件の中心人物であり、事件に際して切腹している（注14）。

次女の於幾は天明五年（1785）生まれ、享和二年（1802）に義岡相馬久福に嫁す。文化元年（1804）九月十四日、二十歳で没。法号、桂月院殿花屋明香大姉。『奥日記』の関連では文化六年四月十四日に「桂月院様御はかへ瀧御代參ニ参候」という記事があるのみである。

長男の忠寛（忠貫）（注15）は『奥日記』では「旦那様」と書かれる。天明六年（1786）生まれ。壯之助、若狭、山城、又左衛門と称し、隠居後は静洞と号した。寛政六年（1794）正月に元服、享和元年（1801）十月九日に家督相続。文化二年（1805）十二月二十五日に島津左衛門久亮（日置島津家）女を娶る。ところが、彼女は文化五年中に死去。法名、智嚴院殿理一命莊大姉。翌文化六年には島津仲久美の妹を娶るが、間もなく離別し、同八年八月八日に比志嶋隼人範甫女を娶る。『奥日記』は文化六年と十年が残存するが、六年の日記中、島津仲久美妹との婚約（実質的な婚姻）の様子が記録されている。文化六年時「奥様」と呼ばれているのはこの人物であることがわかるが、十年の日記での「奥様」は比志嶋隼人範甫女であり注意を要する。また、文化六年時、忠寛（忠貫）は二十四歳で

前厄の年に当たっており、文化六年二月七日の条で、「一 今日旦那様御役年ニ付、御矢かす被遊候。御日まち被遊候。／一 今晚御役年ニ付、來年霜月迄は毎月御日待被遊候はつニ御座候」とあるように、「役年」(厄年)のため矢数や日待を催していることが見える。

次に忠寛(忠貢)の弟、久倫。『奥日記』では「轍負様」として登場する。天明八年(1788)十二月六日生まれ。寛政九年(1797)十一月十九日元服、徳之助と称する。文化四年(1807)五月、轍負と改名し、同九年(1812)正月二十三日、別家(高六百石)を立てる。文化六年当時、二十二歳。久倫は當時既に結婚をしていたよう、「今日、奥様、轍負様御夫婦様、重富へ御こし被遊候」(文化六年四月十五日条)というように「轍負様御夫婦様」と書かれている。^{ひさ}ただし、妻の出自や名前は未詳である。

三女於古は、寛政四年(1792)六月十二日生まれ。文化六年十月に垂水島津家十二代の貴柄^{たからもと}に嫁ぐ。残念ながら『奥日記』は文化六年九月下旬で切れており、於古の婚礼についての記述を確認することができない。『奥日記』の中で「於古」は越前家上屋敷とは別の屋敷に住んでいるように見える。例えば、文化六年二月二十七日の条、

一 今日於金様、於古様御出被遊候。夜ニ入、四ッ時御立。

これは「於古」が文化六年二月以降見えないと関係があると思われる。あくまで推測ではあるが、十月に婚姻を控えて婚約者(御縁女様などと呼ばれる)として垂水屋敷に入っていた可能性も考えられよう。一方、文化十年の『奥日記』で彼女は「於きさ様」(注16)として登場、しばしば実家を訪れている。日記の表記も敬意が一段加わり、「於きさ様被為入候」(文化十年五月十一日条)といった表現をするようになる。於古(於きさ)は文化十四年七月二十九日没。法名、涼相院殿珠林妙好大姉。

次に三男の定経。寛政五年(1793)七月二十六日生まれ。寛政十二年(1800)七月二十八日に入来院掃部定矩の養子となる。初め、文製婆、のち隼人、平次、平章。『奥日記』には忠救の五十の賀の際に「隼人様」が登場するが、これが定経を指しているか否かは判然としない。嘉永四年(1851)七月二十八日没。

その次が、天璋院(篤姫)の祖母に当たる於珍である。於珍は、寛政十年(1798)六月二十九日の生まれで、文化六年現在、十二歳である。彼女の生活ぶりについては後述する。なお、於珍までの母親は、前述の垂水島津家十代島津備前貴澄の女である。

於珍の下に男子が二人がいるが、いずれも草野助五郎永員女を母とする。緩之助は文化三年七月二十一日生まれ、為五郎は文化六年十一月二十六日生まれ。文化六年当時、それぞれ四歳と一歳である。越前島津家墓地(紹隆寺墓地)にある為五郎の墓碑に為五郎は重富の梅山邸で誕生したとあるので、緩之助・為五郎兄弟は父忠救とともに重富を生活の場としていたものと思われる。実際、『奥日記』では時折鼓川邸にやってきて重富に帰っていくことが見えている。

この他に、越前家には前藩主島津斉宣の子で、文化七年(1810)四月二十七日に忠貢の養子に入ることになった寛二郎(元服して若狭忠公と改名)がいる。寛政十一年(1799)三月二十八日生まれなので、文化六年当時、十一歳。文化六年の『奥日記』に寛二郎のことが見えている(七月十九日条)。

一 今日、此節寛二郎様御下りニ付、御内之御そふたん被遊候御事御さ候ニ付、信濃様、鶴江崎江御まねき被遊候。

これは江戸から鹿児島へ下ってくる寛二郎に関して重富家下屋敷で家老頸娃信濃と内々の相談(養子縁組に関するものであろう)を行なったことを言っているものと思われる。『鹿児島県史料 島津斉宣・斉興公史料』所収九七~九九号文書は寛二郎の養子に関する文書であるが、これらからは文化七年四月二十七日に養子縁組が仰せ出されたことや、四月二十九日に引越しの予定であることなどが明らかとなる(注17)。文化十年の『奥日記』では、すでに元服した寛二郎は若狭と称していたため、「若狭様」「若旦那様」と呼ばれている。忠公と今和泉家の於貞との縁組について藩主の許可が出たという件が『奥日記』に見えているが(文化十年三月二十八日条)、同時に許可された於珍の縁組と合わせて後述する。

同じく前藩主斉宣の子である武五郎が『奥日記』に見える。享和二年(1802)五月十五日に生まれた武五郎は同年十月に忠寛の養子になるよう命じられ、まだ幼稚ゆえ本城(鶴丸城)に留まることを認められている。しかし、理由は判然としないが、文化六年六月、越前家を去っている。『奥日記』には節供などの行事のほか、越前家から「常之御祝儀」をしばしば申し上げており、公子に対して丁重な扱いがなされていることが見て取れる(注18)。

この他に、『奥日記』に登場するが素性の判然としない女性がいる。それは「於かち様」と呼ばれていて、『奥日記』では二度登場し(いずれも文化六年)、於珍と一緒にクリ拾いに行ったり、下屋敷に行ったりしている。重富家墓地には墓碑の間に百万遍供養塔が建てられているが、その中のひとつ(文化五年建立)に「大功德主」として「古」「梶」「珍」と三人の名が彫られているものがある。系図には現れないが、於古と於珍との間に姉妹が一人存在したのであろうか。

背景の説明が長くなつたが、以下に冠婚葬祭、年中行事・信仰、娯楽、奥女中などについての具体的な記述を見ていくことにしたい。

1. 冠婚葬祭

【資料7】《130》《131》

五月三日雨天 今日より入梅ニ入

- 一 今日、玉じゅ院様正御忌日、また智巖院様御日がらニ付、茶立被下候。御かん所ニテ御くわし出来。日置御やしきへ被進候。淨光明寺御はかへ、たき、御代参相勤申候。日置御やしきより、てる、りゆ參被遣候。

「玉樹院様」とは越前家十六代忠紀の妻（玉樹院殿宝屋好珍大姉）のこと（注19）、また「智巖院様」は日置島津家の島津左衛門久亮の女で、前掲『源姓越前島津正統譜抜萃』によれば、彼女は十八代忠寛と文化二年十二月二十五日に結婚、文化五年（月日記載なし）に没した（注20）。『奥日記』では祥月命日を「正御忌日」、月命日を「日がら」と区別して表現しているようである。命日には墓参り（代参）の他、供養のための点茶が行なわれ振舞われたようである。

【資料8】《48》《47》

二月十七日せい天

- 一 今日此程今嶋津なか様の御妹様、こなた御縁女様へ御もらいあそハシ候半と御さた被遊候處、今日、かの御方々きつと御請御座候。右ニ付、御いわひ上り候。こなたへ御引こしの御日限は来ル廿一日御日からよろしく、只今は御さしひかへ内ニテ御内々御滞在の筋ニ御引越のはつニ御座候。恰之助様御出被成候。……

【資料7】で、当主の忠貫の妻である島津久亮の娘が文化五年中に死亡したことを見たが、その後室として島津仲久芳の妹をもらうことが決まったという内容である。「縁女様」とは一般に婚約者を指すが、正式な藩からの許可が下りていないためこのように表現したものであろう。というのは、「只今は御さしひかへ内ニテ」とあるとおり、亡妻（智巖院）の服喪中であったことが関わっているものと推測する。二月二十一日には表向き「滞在」の名目で引き移ってくる予定だというのである。二月二十一日の条（《45》）には予定通り、島津久山夫婦（姫の両親）、久道の妻および輿入れをする姫が越前島津家邸を訪問、内々に盃事を済ませ、召使う者たちへも姫から盃を与えたことが見えている。これ以降の日記で姫は「奥様」と呼称されている。二月二十五日にはこの姫（奥様）は初めて実家に戻り（《152》）、二十八日には於金（忠寛の伯母で川上右市久柄の妻）によって「御まゆ御はらい」が行なわれた（《153》）。残念ながら、挙式の模様を記した日記は現存しないが、『源姓越前島津家正統譜抜萃』によれば、文化八年八月八日、忠貫は比志嶋隼人範甫の女を娶っており、これ以前にこの姫は離別されている。

【資料9】《30》《19》

九月十九日せい

- 一 御機嫌よく御目さめ被遊候。旦那様五本松江御上り被遊、八ツまへ御下り。
一 今日御隠居様正御誕生日□□□御五十の賀、御本式御むつかしく候付、其御心持ニ而、かねての御たん生御祝少し御念御入あそハシ候。
一 美作様御夫婦様、小源太様、□之助様、桂昌院様、鞠負様御夫婦様、隼人様、主計様、悦之助様、おとみ様、平様、御出。さん上 才助殿、二角殿、直助殿、庄八殿、源蔵殿、甚助との。
一 今日御祝ひニ付進しまゐらせ候物、
一 御両種

九月十九日は、隠居忠教の誕生日であり、しかも五十歳の節目の誕生日であった。「御本式」の五十の賀の祝いが難しいので、そのつもりで例年の誕生祝いよりは少し念を入れて祝ったという内容である。忠教は明和元年（1764）九月十九日の生まれ（注21）であり、五十歳はまさに文化十年（1813）に当たる。「御本式御むつかしく」というのは、おそらく文化朋党事件の影響や財政状態の悪化がその背景にあるのであろう。同じ十九日の記事に当主が五本松屋敷に出向いたことが見えているが、五本松屋敷に滞在していたのが、藩主齊興の後見役としてお国入りをした島津重豪であった（後述）。

これらの他、『奥日記』に命日における供養の記事が見えるのは、十六代当主の忠紀（珪巖院殿淨阿鉄心大居士）の六月五日、十五代忠長（「越前様正御忌日」とある）の八月廿六日、忠教の長女の於許（「圓心院様正御忌日」）の九月二日である。

2. 年中行事・信仰

①節供

【資料 10】《85》《84》

五月五日天氣

- 一 御機嫌よく御目さめ被遊候。且那様御登城被遊候。御規式相替らす上ル。御客様段々被為入候。參上人御座候。
- 一 ちまき 一わつつ

重富梅山下屋しき、於きさ様、日置御屋しき、ひら、いいむた、義岡との進しられ候。

慈誠院様、當年は御こし被為入候ゆへ、かの御方へも被進之られ候。……

節供について『奥日記』は、人日（一月七日）と七夕（七月七日）の日記を欠いている。上巳・端午・重陽については残っているが、「御規式」の模様を細かく記すことはなく、「何も之通り」などと簡潔に記載されることが多い。【資料 10】は文化十年（推定）の端午の節供について記したもの。「ちまき」（注 22）が重富にあった梅山下屋敷（隠居屋敷）をはじめ親類へ一把づつ配られたことが分かる。「於きさ」は垂水家に嫁いだ於古のこと、「日置御屋しき」は忠寛の前妻の実家、「ひら」は現在の鹿児島市照国町にあった比志島家（忠寛維室の実家）、「いいむた」は「蘭牟田」郷を領している樺山家（忠寛の姉の嫁ぎ先）、「義岡さま」も忠寛の姉の嫁ぎ先である。

また、節供ではないが、八月の十五夜や九月の十三夜には祝儀がとり行なわれた。『奥日記』には両年とも八月十五日条を欠くので詳細は不明ながら、文化十年の九月十三日には「御月見之御祝義、御いわひ上ル、次へも被下候」と簡潔に記されている。

②六月灯

【資料 11】《71》

六月朔日 半天

…（中略）…

- 一 今晚御庭御いなり様六月堂御座候。御すいもの、御てうし上ル。御茶屋の御品いろいろ上ル。……

【資料 12】《67》

六月七日雨天

- 一 御機嫌克御目さめ被遊候。今晚御庭へん天様六月堂御座候。……

【資料 11】【資料 12】はいずれも文化十年（推定）の記事である。「六月堂」は「六月灯」の宛字であろう。「六月灯」は現在でも行なわれている鹿児島の年中行事のひとつ。現在は神社において行なわれる行事だが、屋敷内に祀られていた稻荷や弁天の祠に燈籠が掛けられたのであろう。六月灯の行事が邸内で行なわれていた点、興味深い。

③天神参詣、伊勢講、二十六夜待

【資料 13】《73》

奥様儀、御天神様江御参けい被遊候。

五月廿六日晴

- 一 御機嫌よく御目さめ被遊候。今日御伊瀬構御座候。於珍様江被為入候。七ツ時分御客様、參上人御座候。五ツ過、御立。
- 一 今晚廿六夜待御座候。

文化十年の記事である。二十五日は天神の縁日。鹿児島では「萩原天神」か「磯天神」が有名であったが「奥様」が参詣したのはどちらであろうか。同じ年の三月十七日にも彼女は「萩原天神」へ参詣した記事が見えている。五月二十六日の日記は意味が取りにくいか、於珍のところで伊瀬構（伊勢講）の祈祷などが行なわれたものか。「二十六夜待」については、当主忠寛（忠貴）の厄年の前年に当たっていたため毎月行なわれる旨の記録が見える（文化六年二月二十六日条）。この他に「十二夜待ち」「二十三夜待」が行なわれていた。

3. 娯楽

馬乗り、網引き、湯治、吉野野馬追見物、淨瑠璃などを紹介する。

①馬乗・網引

【資料 14】《66》

八月七日せい天

- 一 今日旦那様御事、谷山江御ゑん馬ニ御出被遊候。夜ニ入、御帰り。

【資料 15】《113》

- 一 若旦那様御事、今日御馬御入門被遊、川田伊織様、ひつ嶋隼人様御出。

【資料 14】は文化六年八月七日の記事、【資料 15】は文化十年三月二十八日のもので、今和泉家との婚姻が藩から認められた件（後述）に続く部分である。忠寛（忠貢）はしばしば「馬のり」を楽しんでいるが、それを行なう場所は特に日記には書かれないと。【資料 14】では遠乗りの記事で「谷山」（鹿児島市の南部）まで馬を走らせたことが分かる。

【資料 16】《6》

七月廿五日晴

- 一 御機嫌克御目さめ被遊候。旦那様御事、六ッ過る櫻嶋江あみ引ニ御出被遊候。夜ニ入五ツまへ御帰り。……

文化十年七月二十五日早朝から桜島へ「網引」に行ったというもの。漁の見物ではなく、忠貢みずから網を引いたのである。この他に安楽温泉へ湯治に出かけたり（文化六年四月六日）、鶴の声を聞きに行ったりする記事（同年八月四日）が見られる。青年期にある忠寛（忠貢）は武士の嗜みと娯楽を兼ねて外出することが多くあったようである。

② 吉野馬追

【資料 17】《134》

四月廿一日半天

- 一 今日吉野馬追ニ而、於金様御事、通り御見物ニ御出被遊候。

【資料 18】《90》《89》

四月廿七日晴

- 一 御機嫌よく御目さめ被遊候。今日吉野御馬追ニ而、垂水^{（すい）}慈誠院様、美作様御夫婦様、桂昌院様、とをり御見物ニ御出被遊候。御出被遊候、夜ニ入、しやうるり御聞あそハシ、四ッ過御立被遊候。
- 一 御かこ、さかな、御かこ之内、御せんへい。慈誠院様^{（よし）}御出ニ付進しられ候。

【資料 17】は文化六年の、【資料 18】は文化十年の記事である。牧が置かれていた吉野村では毎年四月に馬追が行なわれていた。馬追は笠と呼ばれる柵などで囲った場所に野馬を追い入れて、二歳馬を選び分ける行事。城下の諸士が乗馬して原を乗り回り、野馬を追う。鹿児島の諺で「人の多く集る時は、御馬追のごとく」（注 23）と言うほど見物人が集まった。越前島津家の上屋敷（鼓川邸）は吉野村へ通じる街道に面していたので、三百騎ともいう城下士の行列を見物するために、親戚の女性たちが集まってきたのである。「美作様御夫婦様」とあるのは垂水島津家の島津貴柄とその妻である於綺佐（於古改名）である。

③ 浄瑠璃

【資料 19】《11》（図版 2）

- 一 今晚御隠居しやうるりかたり御よひあそはしひ付、今和泉御屋しき奥様、清光院様、於貞様、暮時分^{（くわ）}御出被遊候様ニ萩の

文化十年十月十八日の記録であり、日付が残る日記のうちで一番新しいものである。【資料 18】でも越前島津家の人々は吉野馬追の日の夜に、浄瑠璃に耳を傾けていた。しばしば浄瑠璃語りが屋敷に呼ばれているが、浄瑠璃を好んだのは主に「御隠居」や女性たちであったようである。【資料 19】では越前島津家邸と大龍寺を挟んで至近の距離にあった今和泉屋敷（御内邸）の女性たちを、「萩の」という奥女中を遣わして招待したことが分かる。「奥様」とは当主島津安藝忠厚の正室で市田勘解由教國の二女於遊歌（ゆか）（注 24）。江戸で育った於遊歌は寛政十二年（1800）四月六日に忠厚と結婚した。「清光院」は「源姓和泉氏嫡流系図」では忠喬の項に「天保元年庚寅正月二十九日祖母清光院卒」とあるとおり、忠喬の祖母である（注 25）。「於貞」は後述するように島津忠公と婚約中

の女性である。【資料 19】には芸人の名前が挙がっていないが、芸人としては淨瑠璃語りの「時蔵」がよく呼ばれている（計四回）。その他、「梅太夫・次郎助・時蔵」（文化十年九月十八日条）、三味線弾の「菊尾都」という盲人らしき者も現れる（同八月朔日条）。

④茶摘み・栗拾い

【資料 20】《175》

三月十四日せい天

- 一 今日もかつ浦山御茶取御座候。於珍様御事、勝浦山御出被遊候、暮時、御帰り。……

【資料 21】

八月九日半天

- 一 今日何事もなく。於かち様、於珍様御事、勝浦山江くり御ひろいニ御出被遊候。

越前島津家は、鹿児島城下には鼓川の上屋敷のほかに鶴江崎（現在の鹿児島市稻荷町）と、この「勝浦山」（現在は葛山と表記）とに下屋敷を所有していた。日記によれば、当主をはじめ一家の者がしばしばこの二つの屋敷に出向いている。鶴江崎が海に面しており、領地である重富へ船で向かうにここから船を出したと推測されるのに對し、シラス台地の上に位置する勝浦山の別邸は山の幸に富み、資料にあるように夏は茶摘み、秋にはクリなどを拾いにいくところであった。

4. 奥女中の出入り

『奥日記』には奥女中が使者や代参にたった記事や、暇をもらう記事が散見する。文化六年のものには「当番」の奥女中の名前が毎日記録されている（文化十年のものには見られない）。彼女らの出身階層や出仕の期間など詳細は不明なことがほとんどである。既に、奥女中の活動が窺える記事を出しているので、ここでは奥女中が暇をもらう際のやりとりを紹介することにする。

【資料 22】《145》

今日よね事、長御いとま申上、弥ねかい之通り、御暇被下候事。 則御いわひ進上申上候事。旦那様合せいとふ二百疋御もくろく被下候。奥様より御わた入、一つハ色物被下候。輒負様御夫婦様、於たか様合せい銅二百疋、御もくろく被下候。右之通り被下候事也。

この資料は【資料 5】に続く部分（文化六年三月十九日）である。文化六年の『奥日記』には「当番」として毎日二～四名の奥女中の名が記録されている。同年の二月を例にとると、概ね「吉を、しつ、やす、よね」の組と「たき、とわ、つな、りつ」の組が一日交代で勤めている（当時、この八名が当番をする奥女中のすべてである）。それが三月になると組が崩れ、二人で勤める日もあれば、一人が二日連続で勤める場合も出てくる。この日、「当番」を勤める奥女中のひとり「よね」が退職することになった。「せいとふ」とは「青銅」で、錢のことをいう。二百疋は錢二千文。その目録が下げ渡された。

5. 重豪のお国入り

【資料 23】《41》《39》《16》

九月十四日せい

- 一 御機嫌よく御目さめ被遊候。

一 大御隱居様、今日御光着被遊候ニ付、武御やしき江、六ッ半比合御出被遊、五本松へは御着まへ御見合ヲ以、御上り被遊候。御目見江一通り被為済、直ニ御下り。………

九月十五日せい

一 御機嫌よく御目さめ被遊候。旦那様 御登城被遊候。夫々直ニ 五本松江御上り被遊候所、夕方合被為召候との御事ニ而、八ッ時分御下り。

一 今晚暮時分合御ゆるゆる御咄シニ御參上あそハし候。七ッ時分合安藝様御方迄御出あそハし、御刻限御見合ニ而安藝様御同道ニ而御上り被遊候。四ッ半比御下り。

一 御臺様より御拝領の御菓子一箱、唐^(チ)色々大御隱居様合旦那様江御拝領被遊候。

「大御隱居様」（重豪）の帰国（注26）を受けて、忠貴が武村にあった本家の別邸へ向かった。「五本松」とはその別邸のある土地の名である。「源姓和泉氏嫡流系図」（注27）によれば島津安藝忠厚は文化八年十月二十八日に武村に「宅一区」を賜ったが、そこは五本松別邸と隣り合っていた（鹿児島県立図書館蔵『鹿児島城下明細図（文政四年）』）。以前「大磯山下の宅地」を藩に献じたことから給付されたものである。藩主齊興は天保七（1836）年二月、今和泉家に田之浦別邸を与える変わりにこの「宅一区」を自らのものとした。それはともかく、帰国した重豪は「五本松別邸（五本松御茶屋）」を滞在中の宿舎としており、到着日の翌日、忠厚と一緒に五本松別邸まで出向き、重豪と対面をして夜十一時ごろ辞去した。

この後、「奥日記」では、將軍（「公方様」）、世子（「大納言様」）、將軍御台所（重豪の娘、茂姫、後の広大院）をはじめ大奥の奥女中たちとの贈答品の数々が細々と記載されているが、本稿では割愛する。

6. 於珍の少女時代

先述したように忠教の四女於珍は、同じ一門家の今和泉島津三次郎忠皎に嫁いだが、周知のように忠皎（後、忠喬と改める）の跡を継いだのが本家から養子に入った忠剛（篤姫の実父）であるので、於珍は篤姫の祖母ということになる。少女時代の篤姫については、それを知る手がかりが非常に少ないが、「奥日記」の中の於珍の生活を見ることで、篤姫（於一）の少女時代を推測することは十分可能であると思う。

①教養

【資料24】《121》

一 さかな 一かこ
一 御銚子 一樽

於珍様より被遣候、中原林左衛門殿江、此程を度々御手本認、さし上まみらせ候ニ付、御あい拶として被遣候事。

【資料24】は年月日を確定することができない一枚である。魚一籠と酒一樽が於珍から中原林左衛門へ贈られたという。中原林左衛門は当時藩内で有名な能書家（注28）であり、たびたび於珍のために手本をしたため献上したのであった。『奥日記』では女性たちの出入りについては記述があるが、たとえば屋敷内でどのような教育がなされ、外出先の御屋敷でどのような遊びをして過ごしたのかといった具体的な記述に出会うことはあまりない。この記事は上級武家の女子教育の一端が窺えるという意味で大変貴重なものであろう。

書とともに和歌の素養も重要視された。於珍の姉の於古（於綺佐）は垂水家へ嫁いだが、垂水島津家では十八世紀の後半から、和歌を嗜むことが広く行なわれていた。於綺佐は飛鳥井大納言雅光に入門している（注29）。『奥日記』において和歌の修行や応酬の記事は見当たらないが、記述がないだけで和歌の基礎的な学習は行なわれていたと推定する。時代は下るが、元治元年（1864）七月に成った「元治元年七月順聖公七回御忌追善詩歌」には、一門家を初めとする多くの女性たちが歌を寄せている。四季折々の挨拶として、また追善供養のために普段から和歌を詠むことが求められていたのである。

②成人、結婚

【資料25】《179》

一 今晚、於珍様御部屋江御臺御ひらき 何れも様被為入、八ツまへ御すミ被遊候。
當はん たき、とわ、つな、りつ

《179》は文化六年の三月三日の《178》に接続するものと推定した。この日、「御臺御ひらき」が行なわれた。「御臺」とは貴人の食物を載せる台のことである。この「御臺ひらき」という行事は女性の通過儀礼のひとつと考えられるが、その詳細は未考である。

【資料26】《115》《114》

三月廿八日

……安藝様の御息女様、若狭様江御縁組の御願被仰上置候所、御ねがひ之通、被為仰蒙候。
一 於珍様御事、三次郎様江御縁組御ねがひ被仰上置候所、願之通りニ被為仰蒙候。

三月二十八日から四月にかけて、日記は断絶なく続いているが、筆跡も内容も連続性が認められる。実は先述した【資料4】はこの三月二十八日の後に接続し、しかも《114》《113》《112》《111》の順に並んでいる。したがって、越前家と今和泉家とのこの縁組を藩が承認したのは文化十年のことと断定してよいだろう。

当主の忠貢が以前から願っておいた今和泉家の息女と若狭様（忠公）との縁組、それに於眎と今和泉家の三次郎忠皎（後に忠喬）との縁組が願の通り許可されたというもの。この日は若旦那様＝忠公の誕生日でもあり、めでたいことが重なったのである。忠公の相手は、先述したように島津安藤忠厚の娘於貞で、寛政十一年（1799）八月十三日生まれであるから忠公とは同年であり、文化十年には十五歳である。周知のように忠厚は島津重豪の三男であり、忠公から見ると実父の弟（叔父）に当たる。

一方、於眎は文化十年時十六歳、忠皎は文久二年（1862）十月十二日に六十三歳で没しているの（注30）で、文化十年時は十四歳ということになる。忠皎は忠厚の実子である。

この二組の男女の婚礼がとり行なわれたのは、いずれも文化十三年（1816）のことであった（注31）。三年以上経過して正式に婚礼を挙げたわけであるが、前述のように両家の屋敷は至近の距離にあり、忠貢の例でもわかるように、いわゆる婚約者の段階においても家臣たちからは「奥様」と呼ばれ、実質的には正室扱いされたものと推測する。

於眎の姉の於古は母の実家である垂水島津家に嫁いだ。於古（於綺佐）は二十六歳の若さで他界するが、忠貢の娘於繁もまた垂水家へ嫁ぐのである。祖母の実家に嫁ぐ例は一門家をはじめ上級家臣の間では一般的なことであった。越前家でいえば、忠紀の正室は樺山久初の三女であったが、忠紀の孫の於許は樺山権左衛門久言（久初の孫）に嫁いでいる。これは妻の実家から養子を迎えることについてもいえることである。血縁の近さが婚姻を行う上で重要視されたためであろうし、日常的に親戚として交際するなかで気心の知れた人物を選ぶことにも繋がっている。

こうして考えると、今和泉家の姫である一子（後の篤姫）がその祖母の実家、すなわち越前島津家に嫁ぐ可能性は高かったといえるであろう。

当時の女性たちは一上級武士の娘であっても一概して短命であった。その原因はいろいろ考えられるが、多産という要因が大きな比重を占めていることは否定できないであろう。

本稿でたびたび取り上げた於古、および忠公と於貞の長女於千百の出産の履歴を次に掲げる。

《於古（於綺佐）》（前掲「垂水島津家家譜」による）

（文化六年（1809）十月八日、島津玄蕃貴明（後、貴柄）に嫁す。《十八歳》）

文化七年（1810）九月十九日、小源太（後の貴典）を出産

文化九年（1812）二月二日、信之介（後の久富）を出産

文化十年（1813）十月十六日、常五郎出産

文化十四年（1817）七月二十二日、昌之介（後の将清）を出産

文化十四年（1817）七月二十九日没。享年二十六。

《於千百》（前掲『源姓越前島津正統譜抜萃』による）

（天保七年（1836）八月十一日、島津忠教（後、久光）と結婚。《十六歳》）

天保七年（1836）十二月八日、於鶴を出産（夭折）

天保九年（1838）正月二十日、於定を出産

天保十年（1839）二月二十日、於哲を出産

天保十一年（1840）四月二十一日、壯之介（後の忠義）を出産

天保十二年（1841）四月二十六日、篤二郎（後の久治）を出産

天保十三年（1842）七月晦日、包二郎を出産（夭折）

天保十四年（1843）閏九月七日、於寛を出産（夭折）

天保十五年（1844）十月二十二日、紀寛（後の珍彦）を出産

弘化二年（1845）十一月二十二日、紀堯（後の忠欽）を出産

弘化四年（1847）五月十日没。享年二十七。

家譜の記載がすべて事実かどうかはさておき、彼女らがいかに《産む性》としての役割を担っていたかを改めて考えさせられる。

於眎が親族の中で大切にされ、特に「於ばば様」（「慈誠院」か）からその長寿にあやかることが切に願われていることを示す資料を最後に掲げて、本稿を閉じることにしたい。

【資料27】《87》《86》

一 御機嫌よく御目さめ被遊候。旦那様、於眎様東福ヶ城江、御ゆるゆると御はなしニ御出あそハシ、夜ニ入、お帰り。旦那様御てうし進しられ候。於眎様されいとふふ進しられ候。今日玉樹院様正御忌日ニ付、御茶立上ル。次ニも被下候。今晚御例之衆、たんたん御よひあそハシ候。にきにきしく被為入候。御ばば様今日白りんす□物

御わた入一つ、御年御あやかりあそハし候様ニコハめしたく。於珍様江進しられ候。

於珍（後に於義と改める）は、萬千代、卿兵という二人の男子を出産、夫とは文久二年（1862）十月に死別、「壽鏡院」（注32）と名乗り、明治二年（1869）四月十六日に没した。享年七十二。「於ばば様」の願いはかなったというべきであろう。

（注1）尚古集成館編『島津家資料 島津氏正統系図（全）』（島津家資料刊行会、昭和六十年刊）

（注2）（注1）と同じ。

（注3）その一部は平成十九年十月と十一月の二回にわたり、「鹿児島大学附属図書館貴重書公開 没後百二十年 島津久光 玩古道人 の実像」展において紹介した。なお、「誠忠武鑑」の各丁の裏側に日記らしきものがあることに気づいたのは、三年ほど前のことであるが、平成十九年一月に縦糸を切り、袋縫じになった料紙の裏側を調査することを願い出て館より許可を受けた。

（注4）歌稿には「寄露懷舊／はかなくも秋のわかれの／露そひて忍ふなみたの／袖そひかたき」「ありし世の言葉の花に／はかなくも 露かけそへて／手向をそする」などの歌がみえる。

（注5）以下、「奥日記」本文の引用に際しては、読みやすさを考えて句読点を補い、躍り字はこれを聞いた。また日付などを除き、改行はこれを無視した。

（注6）一方の群は「一 海機嫌よく御目さめ被遊候。」という定型文で本文が始まる。

（注7）『垂水島津家家譜』（『垂水市史料集（六）』（昭和六十年三月、垂水市教育委員会）所収）。

（注8）湯浅吉美編、平成二年、汲古書院刊。

（注9）中世から近世にかけての同家の歴史のあらましについては、「特別展図録 越前（重富）島津家の歴史」（姶良町歴史民俗資料館、平成十六年十月）を参照した。

（注10）薩摩藩では江戸の中奥日記（東京大学史料編纂所蔵）が知られている。また、他藩では中津藩の中奥日記も紹介されている。

（注11）鹿児島大学附属図書館玉里文庫蔵、地の部3番箱2024。

（注12）（注7）と同じ。

（注13）「一 今日、典膳様御登りニ付、御隠居様御事、わざわざ重富合一日かけニ御帰り被遊候。六ッ過ニ御着被遊、また七ッ半過、重富へ御帰りあそハし候」（文化六年四月二日条）

（注14）現存する『奥日記』は文化朋党事件直後の文化六年のものを多く含んでいるおり、それに越前家と権山家とは姻戚関係にあることから、日記に事件の影がどのように現れているか精査する必要があるが、今後の課題としておきたい。

（注15）忠寛は文化七年八月十二日に名を忠貞と改めている（前掲『源姓越前島津正統譜抜萃』）

（注16）垂水島津家で編纂された歌集『浪の藻屑』では「綺佐子君」、「源姓越前島津正統譜抜萃」では「於古^{ヒタチ}、於喜佐^{ヒササキ}」とある。結婚を機に改名がなされたものと思われる。

（注17）例えば九八号文書には「一 寛二郎様御儀島津若狭殿養子被／仰出候付、明後廿九日九時御引越ノ管候……」とある。なお、表題の「寛二郎君花岡家養子ニツキ……」は「越前家」の誤りである。

（注18）例えば、「一 今日武五郎様へ常之御祝儀被仰進候。御本丸^丸も同じ御事ニ被仰進候」（文化六年二月二十八条）

（注19）玉樹院の墓は現在、姶良郡姶良町重富の紹隆寺墓地に現存。但し、墓碑に生没年等の記載はない。遂に、この『奥日記』からその祥月命日が判明したことになる。

（注20）智巖院の墓も現存。これも墓からは生没年を知ることはできない。『奥日記』から智巖院の没年が、文化五年（四月・五月・八月以外の）三日であることがわかったことになる。なお、重富島津家墓地には「古」「権」「珍」の三名を施主とする「百万遍供養塔」は智巖院の墓の側に建てられており、「文化五〇七月三日」と読めるので、智巖院の祥月命日は七月三日である可能性が高いと思われる。

（注21）前掲『源姓越前島津正統譜抜萃』（注11）

（注22）鹿児島において「ちまき」と呼ばれるのは、いわゆる「灰汁卷（あくまき）」で、もち米を竹の葉にくるみ、灰汁をいれて蒸したもの。

（注23）伊東凍舎『鹿兒島ぶり』（『日本庶民生活史料集成 第九卷』（1969年、三一書房刊）所収）。なお、吉野馬追については平田猛『吉野の史蹟』（昭和六年、私家版）が詳しい。

（注24）『源姓和泉氏嫡流系図』（島津和子氏蔵、大正十四年写）

（注25）清光院の墓は今和泉島津家墓地（光台寺墓地）に現存。平成十八年度に指宿市教育委員会が行なった同墓地の学術的調査に基づいた中摩浩太郎「今和泉島津家墓地について」（『指宿市考古博物館 時遊館 COCCO はしむれ 博物館年報』第7号、平成19年3月）にいう11号墓地一中摩氏が指摘しているように、同墓の中で唯一「家祀型」の墓石一が清光院の墓に当たる。再興四代目の忠喬の祖母は通常でいえば、二代目忠温の正室に当たるが、中摩氏が指摘するように忠温正室（『源姓和泉氏嫡流系図』にいう「菱刈藤馬實詮女於達」）の墓は忠温と対をなす宝慶印塔型の10号墓と推定されるので、「清光院」は忠喬の父である忠厚の実母の可能性が高いのではないかと思われる。そう考えることで墓の形式の違いも説明できるのではないか。なお、『島津氏正統

系図》(注1)によれば忠厚の母は「島津式部少輔久経女」である。一説に忠厚の母を「島津采女久芳」とするものもあり、事実関係については後考を期したい。

(注26)『鹿児島県史料 旧記録追録 七』1293号文書は、老中宛に帰国御礼のために記されたもので、「……願之通湯治御暖被下、今日同氏豊後守國元江致到着、難有仕合奉存候、為御禮呈使札候間…/九月十三日」とあって日付が一日ずれているが、前掲「源姓和泉氏嫡流系図」では島津忠厚は十三日に伊集院郷苗代川まで出迎えに行き、「明日公遷鹿児島、入五本松假館」とあるので十四日の到着は間違いないであろう。

(注27) (注24)と同じ。

(注28)生没年未詳。木脇啓四郎は「鹿児島中近今ノ名筆」のひとりとして中原林左衛門の名を挙げている(木脇啓四郎『萬留』(明治三十一年成))。

(注29)伊集院兼恒編『浪の藻刷』1959番の詞書による(福井迪子「垂水の文学(三)『浪の藻刷』(垂水市教育委員会蔵)一南九州の国文学関係資料(十九)一』(『鹿児島県立短期大学地域研究所研究年報』16号、1988年3月)を参照した)。

(注30) (注24)と同じ。

(注31)前掲『源姓越前島津正統譜抜萃』による。忠公と於貞は文化十三年十月十一日、於珍と忠皎は同年十二月二十三日。

(注32)重富島津家墓地(紹隆寺墓地)にある忠貞のために建てられた歎灯に「垂水 永壽院/今和泉 壽鏡院/喜入 直」とあることからの推定。

本稿を成すに当たり、鹿児島大学附属図書館には貴重な資料の調査ならびに図版掲載をご許可いただいた。島津和子氏には「源姓和泉氏嫡流系図」の使用をご快諾いただき、江口淳司氏には中摩浩太郎氏の論文の存在についてご教示をいただいた。また、荒田邦子氏には宮之城島津家に関する情報をいただき、中摩浩太郎氏には今和泉島津家の墓地について様々なご教示を賜るとともに、本誌への寄稿を勧めていただいた。この場を借りて厚く御礼を申し上げる次第である。



図版1 「奥日記」表紙

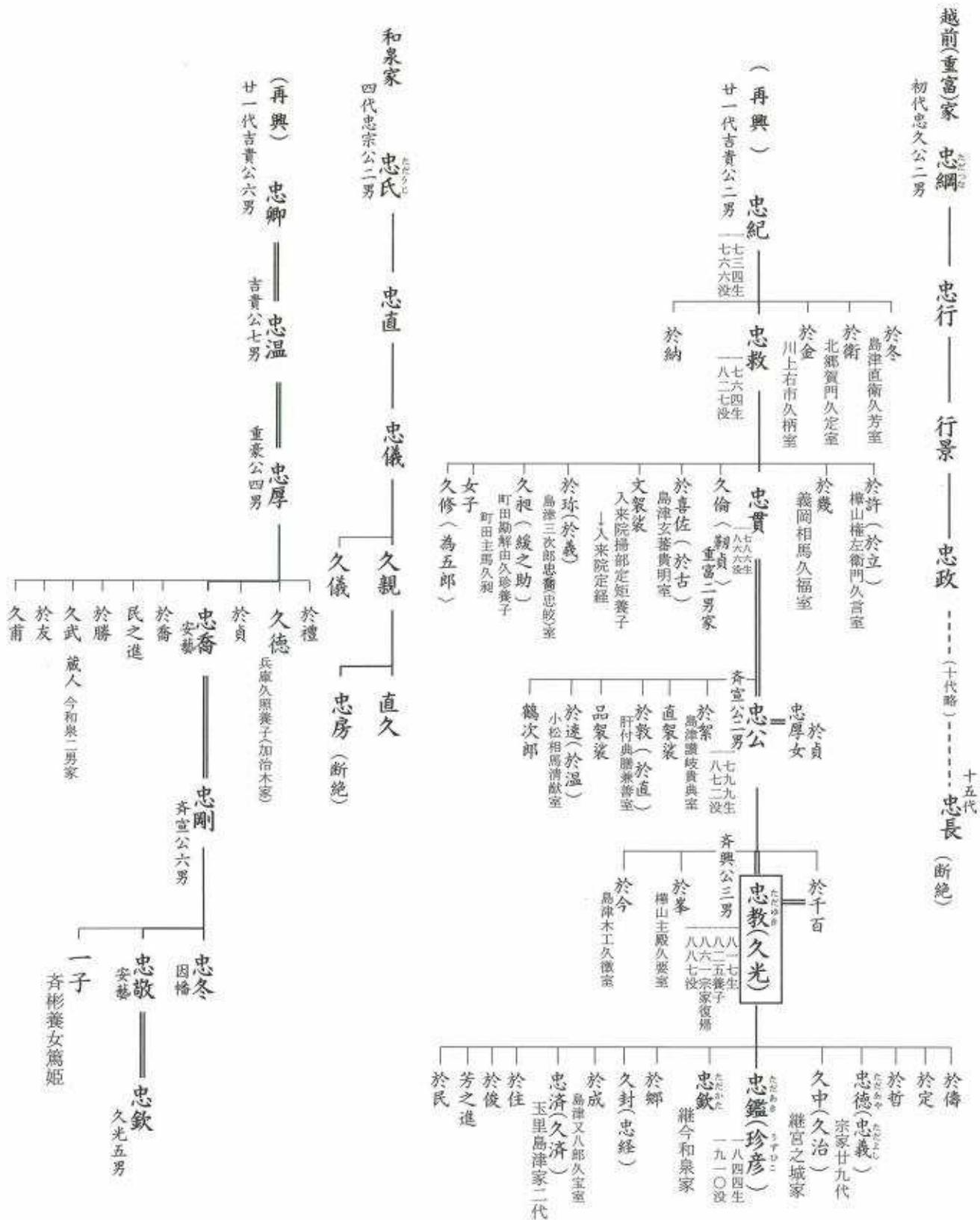


図版2 「奥日記」 文化10年10月18日条

表3. 『奥日記』に登場する主要人物

		於納 夭折	忠教 〔御隱居様〕 一七六四年生	於金 〔桂昌院〕 一七六三年生	於衛 〔林昌院〕 一七六年生	忠寛 〔忠貞〕 〔旦那様〕 一七八六年生	忠寛 〔忠貞〕 〔旦那様〕 一七八五年生	於幾 〔桂月院〕 一八〇四年没	於許 〔圓心院〕 一七八四年没
紀修 〔緩之助様〕 一八〇九年生	紀昶 〔為五郎様〕 一八〇八年生	於珍 〔於珍様〕 一七九八年生	定經 一七九三年生	於古 〔於古様〕 一七九二年生	久倫 〔朝負様〕 一七八八年生	忠寛 〔忠貞〕 〔若狭様〕 一七九九年生	忠公 〔忠貞〕 〔若旦那様〕 一七九九年生		
				武五郎 〔武五郎様〕 一八〇二年生					

〔 〕内は文化六年(1809)時点の年齢(数え年)。〔 〕内は『奥日記』での呼称。



越前家・今和泉家略系図

博物館年報・紀要 第8号
平成21年3月発行

発行者 時遊館COCCOはしむれ
郵便番号 891-0403
鹿児島県指宿市十二町2290番地
電話番号 (0993) 23-5100

印刷所 (有)指宿新生社印刷
郵便番号 891-0404
鹿児島県指宿市東方8068-3
電話番号 (0993) 24-2002

